

Title	江南訪古記
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.4 (1939. 7) ,p.1a(529a)- 84(612)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:古蕩埴室墓内出土遺物寫眞
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



第一圖版 I 古蕩磚室墓發見瓦壺 A



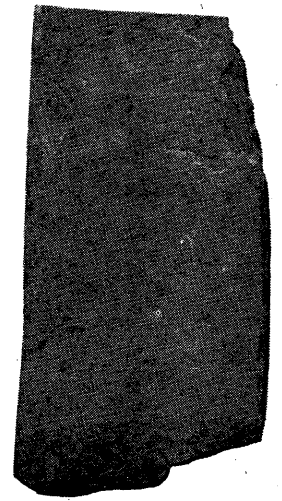
II 同 B



1



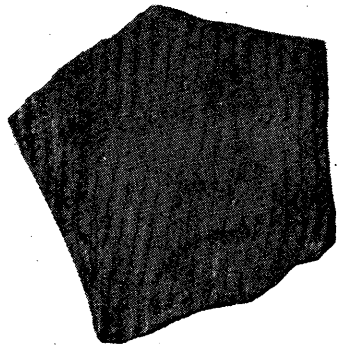
2



3



4



5



6



7

第三圖版 古 蕩 發 見 遺 物

江南訪古記

松本信廣

目次

序説

- 一、東京より南京まで
- 二、南京の調査
- 三、杭州の調査
- 四、古蕩石虎山遺跡
- 五、上海

序説

久しく善隣の友邦たりし日支兩國が盧溝橋事件以來全面的抗爭をなさざるを得ない破目となつたことは誠に不幸此上ない事態であるが、此の莫大な犠牲に依り東洋の新機構が確立せられ、日支兩民族提携への第一歩が踏み出されるならば戦禍を蒙つた無数の生靈も亦慰められること、信ずる。たゞその戦場となつた支那中原に古より蓄積せられた古文化資料が破壊散逸せられ、東洋文化の誇りたるべき考古美術の標本が毀損されたならば支那のみならず我國否全世界にとつても重大な損失である。大正の震火災の當時我東京の内閣文庫、宮内省圖書寮、靜嘉堂文庫等に秘藏せられる宋版其他の秘籍の安否は歐洲の

東洋學者のひたすら懸念する所となり、佛のペリオ教授の如きは屢々我大使館に之を聞き合したるも當時の我大使館員は帝劇、東京會館等の安否は知るも諸圖書館の安否は一向知悉せず、殊に宋版の何たるやを解せず、尋ねる人を失望せしめたとは其頃巴里に居た日本學者エリセーフ君の直話である。恐らく此度の事變に於て全世界の支那學者は中原文化遺物の運命を氣遣ひ、歴史紀念物の破壊、考古學標本の散逸を憂ひてをることゝ信ずる。支那北部、中部中原の大半を占領しつゝある我國が逸早く其占領地區内の文化遺物が如何程迄戰禍を蒙つたか、また如何に保管せられつゝあるかを調査報告し世界の學界に知悉せしむる義務があると信ずる。此度の戰役開始せられると共に支那側及び列國は日本が支那の文化施設を破壊しつゝあり、支那の學術研究は停止せりと稱し、針小棒大、事實は歪曲せられ、皇軍が全く野蠻人の如く全世界に宣傳せられたのである。戰爭は破壊であり、事實今日占領地區内に於ける大中小學の大半は閉鎖せられ、文化機關が活動を停止してをることは否めない。世界の眼が極東に注がれてをる今日、我國が若し世界輿論の前に公明正大、その行動に毫も疼しきことなきを顯示せんとせば、進んで占領地區内の文化施設再建に努力し、邦人に依る文化機關の運用が世界文化の爲に一層の寄與をなすことを天下に示すべきではあるまいか。

戰前に於ける支那文化機關の活躍はまことに吾人の驚異に價するものあり、河北省周口店に於ける「北京支那人類」の發見と云ひ、河南省安陽に於ける殷墟の犬發掘と云ひ世界の學界に大波紋を劃したる重

大事件が連續した。加ふるに最近の歐米に於ける支那古美術愛玩の氣風は支那最近の學界の飛躍と相俟つて支那文化認識を愈高め、支那側の宣傳は之に乗じて日本文化蔑視の風潮を益々盛ならしめたのである。我國學徒はかゝる事態に直面して座視、世界輿論の惡化を此儘に放置すべき時ではない。一體最近に於ける國民政府は支那國內に於ける外人の學術研究を拒否し、化石標本、動植物標本に至る迄その國外流出を取締り、學問的鎖國の觀があつた。例へば岸上鎌吉博士が長江上流の魚類を調査せんとするや極力之を阻害し、佛のシトロエン探險團を新疆省に抑留し、米のアンドリュー博士の蒙古旅行の化石蒐集品を差押ふるなどの不法を敢てした。今や國民政府の凋落と共に支那中原は幸ひに我國學者の自由研究に委せられたのである。此の又となき機會を利用して支那地下の秘庫を開き、世界學界の爲に新しき學術資料を提供することは我學徒の義務であると信ずる。かゝる目的に促され支那學術調査、古文化遺跡の視察調査並びに發掘の爲吾々は此度の支那旅行を計畫し、幸ひに軍當局の容るゝ所となり、昭和十三年五月愈々斷行することゝなつたのである。

此行に参加した自分の目的は先づ最近支那學者に依つて紹介せられた金山衛及び杭州古蕩の遺跡を調査することであつた。然し現地に来て見ると金山衛附近は敵の遊撃隊が跳梁し、治安甚だ不安であつたのでその調査は一先斷念し、杭州古蕩の調査に専心することゝなつた。また最初の計畫に依ると發掘を主眼とし、支那諸博物館に存する既存標本整理は餘り念頭に置いてゐなかつた。所が上海に着いて上海

自然科學研究所を訪ひ、所長新城新藏博士に面謁したる時氏は之より南京の中央研究院其他の學術標本接收整理に赴く所であり、同研究院歴史語言研究所には夥しき土器があり、其整理を此際是非手傳ひ呉れぬかと言ふ提言であり、吾々としては初めての支那大陸旅行で萬事不案内の場合研究所と行を共にすることが種々便宜を得ることが多いので、時期の關係上不利ではあつたが杭州の發掘を雨期の六月に廻し、南京の調査より先に取りかゝることゝなつた。南京に着いて見ると成程當面の急務は難民の掠略の的となり、見るに忍びざる状態に委せられてをる歴史考古學標本を塵埃の中より救ひ出し、之を完全な個所に移すことなることを理解した。新城所長を中心とする上海自然科學研究所の事業は此實際の必要に應じて立案せられた企畫であり、南京に於ける吾々の仕事は之と協力し、その一部門たる考古學的面を擔任することに費されたのであつた。

一體出發前の我々は南京に對して誠に誤れる認識を持つてゐた。即ち太平天國の亂と辛亥の革命とを經、荒廢した古都に蔣介石が新しき西洋建築を附加したるもの即ち南京であり、舊都の面目は新都市計畫の爲破壊せられ、興味索然たるものあり、學術的に大した價值ある所に非ずと考へてゐた。即ち吾々は「新支那」を知らざりし如く、また新しき南京をも理解してゐなかつたのである。何くんぞ知らん、蔣介石は南京を政治的首都となしたるのみならず之を短日月の中にまた學術的首都に化しつゝあつたのである。一切の貴重なる圖書、學術標本、美術品等は南京に集められ、學術機關また此處に集中し、南

京は支那の學術的中樞たりつゝあつたのである。例へば中央博物院は中山門の附近に建設中であり、之に陳列せらるべき考古標本類は南京に送られて蓄藏せられ、また運搬途上にあつた。此等の標本が皇軍の南京占領後全く放擲せられ、支那土民の荒すが儘に委せられてゐたことは全く遺憾極まる事である。吾人の南京入は五月十七日であり、南京落城以來半年を経過し、甚だ時機を失してゐたが、それでも尙救ひ得るものは救ひ得たのである。

一、東京より南京まで

先づ東京より南京に至る簡単な旅程を記述する。旅行隊は北支那班と中部支那班との二隊に分たれ、前者は本塾講師公爵大山柏氏が主宰し、史前學研究所々員大給尹君を隨へ、映畫班として東京發聲映畫製作所々員木村信兒、吉田勝亮、八子治男三氏を伴ひ、五月九日東京驛を出發し、北京、彰德、大同方面に向ひ、後者は本塾講師柴田常惠氏の班と予の班との二に分れ、前者に學生清水潤三君が後者に大學院學生保坂三郎と學生西岡秀雄の二君が參加し、共に五月十一日東京驛を出發、西下したのである。三田史學會としては初めての大陸旅行であり、驛頭で塾旗や國旗が打振られ、出征軍人を見送る様な聲援を浴びて些か面映ゆき感があつた。五月の車窓は綠美しく蓮華咲く裾野、夕陽輝く海濱など平素學業に縛られかういふ季節に餘り旅行に恵まれぬ吾々にとつて心嬉しい情景であつた。

翌日午後三時長崎驛に下車し、三井物産支店長村上一郎氏に迎へられ、上野屋旅館に投宿する。長崎の町は日本式ではあるが最初葡人に建設せられた匂ひは何處となく残つてをり、今縣廳のある所はもとの奉行所跡であるが、その前の廣場、石を敷いただら／＼路などは中世の歐洲都市を思はせるものがある。展望臺から見た長崎灣、天草、雲仙の翠微は美しく、自家用自動車を驅つて洋服紳士が風合戦の風を碧空に躍らせに來るのも長崎らしいのどけさである。十三日、船に乗込む前に大急ぎで福澤先生の舊跡を尋ねる。光永寺といふのは閑雅な眞宗の一刹で此處に「福澤先生留學址、安政元年」といふ小泉塾長撰及び書の碑が建つてをる。此寺には福澤先生の寄宿せられたと云ふ部屋がまだ残り、また先生使用の机なるものが存してをる。少し離れ、石の築地に沿ひ古めける方形の石井にあり、同じく「福澤先生使用之井」といふ碑があり、その昔の簡素な蘭學書生の生活が偲ばれる。すぐ近くの石段を登りつめ、檜皮葺の諏訪神社の社殿に賽し、旅の安全を祈る。社前の御神籤を引くと大吉が出たのは幸先好かつた。午前十一時、聯絡船長崎丸は無風の港にテープを綿々たなびかせつゝ、出帆した。造船所、教會、稻佐山など次第に小さく、麥の黄なる新綠色濃き岬角の間を抜けて大海に迂り出す。海は鏡の如く穩かで時々エンジンの微動を感じる程度、船中もそれ程緊張した氣分なく、夕食後はニュース映畫などあり、戦時と思はれぬ平靜な航海であつた。

十四日午前、目覺めた時、揚子江の河口に既に接近して海の色が混濁し來り、且つ天候も稍々曇り、

風が強い。國旗の共進會たる觀ある諸外國の國旗をはためかしたジャンク群にすれちがひ乍ら黃浦江を遡ると綠の平蕪の中に點々白き古塔の聳ゆる昔と變らぬ風景が展開される。然し吳淞の上陸地點の邊は破壊の跡慘澹たるものがある。所々外國旗を掲げてをる家屋もあるが、何處に於ても翩々として勇ましく日章旗が翻り、何艘となくすれちがふ日本の發動機船を見ると我占領地たることが強く強く印象づけられる。二時大連碼頭に船は横づけとなり、蘆澤印刷所の若き主人駿一郎君、三井洋行の酒井忠道氏、井上好彌氏の方々に迎へられ、萬歲館別館に入る。此處はもとのサヴォイホテルを日本人が借受けて日本旅館に改造したものであり、日本旅館拂底の爲かうした擴張が絶えず行はれてゐるのである。

取り敢へず三井の自動車で閘北の戦跡を訪れる。煉瓦建の焼けた残骸の蜿蜒々連つてゐる状況は大正震火災の光景と變らない。虬江路と中洲路との合致點で蘆澤君の弟健二郎君が上海日報の記者として敵彈を受け戦傷死せられた地點を訪れ、兄君から其の當時の事情を伺ふ。兩軍相對峙する激戦の最中に我軍の占據する家屋の階上に我部隊の中隊長を訪れ、その歸り、ごく僅かの家と家との寸隙を通過する際敵に射撃せられ、五十日の看護遂に效なく逝去されたのであるといふ。此の邊一帶我軍が一軒一軒苦戦の結果奪取した激戦地で實に物凄い破壊振りである。北停車場の傍の鐵路局に上つて四邊を俯瞰する。之はコンクリート建て六階の大建築物で、屋上に立つと四隅に銃眼の設備が見出され、建築當初より支那側が一戦を準備してゐたことが明瞭である。滿目荒涼として八ヶ月前兩軍激戦の跡がはるばると見渡され

る。商務印書館は爆撃の爲傾き蜂の巢の如く穴があき散々たる殘骸を曝してをる。其處から少し前面に陸戦隊濱萩小隊の決死隊の奪取した民家がある。クリーク對岸の石工の家から橋を渡つて強襲火を點じたとのこと、夏草の中に「海軍三等兵曹佐々木武、下田勝之助」といふ戦死者の墓標が立つてをる。兩軍決死の奮戦の跡、實に物凄いと何とも言ひ様がない。此の夜ブロードウェイに面した部屋に宿られた柴田氏一行は三發の銃聲を聞かれた。これは翌日聞くと戰場から物を盗み出した白系ロシア人二人が歩哨の誰何に自動車を止めなかつたのでその狙撃を受け、一名は即死し、他の一名は重傷を負ふたとのこと、最初の一發は誰何であり、他の二發が犯人に命中した譯で夜間に於て照準を違へぬ我兵の射撃の正確さは驚嘆に價するものである。

吾々の宿つた虬口地帯は未だ原則として支那人の復歸を許さず、寂寥々たるものがある。要所々々に陸戦隊が鐵甲で立ち、吾々は其傍を過ぎる時には默禮をして行くのである。行き交ふ人は軍人が軍屬のみ、支那人は寥々たるもので、それも所在哨兵に誰何され、猫の前の鼠の様におづくしてをる。亡國の悲しさ、戦争には敗れたくないものである。蘇州河を越えて對岸の共同租界の賑はひは昔より甚しく、どの街路も汚ない民衆で一杯である。その中を英國の警備隊が巡邏してをる。國際都市として上海の複雑さは愈々加はつて來た模様である。

上海滞在の第一日（五月十五日）は各方面の歴訪で暮す。三井洋行の酒井忠道氏に案内され、軍司令

部を訪れ、次いで海軍特務部、總領事館を訪問し、佛租界の外れに出て同文書院と上海自然科學研究所とを訪ふ。同文書院はもと租界外にあつたので支那兵の爲に焼かれてしまひ、舊交通大學の堂々たる建物を占據し、些か勝手の違つたといふ感である。グリーン芝生を中心に點々として赤煉瓦の建物が立つてをる。内部ががらんだりの圖書館には今我憲兵隊が入つてをり、バスケットボールの試合場、プールなどが設けられてゐる體育館はそのかみの華やかさを偲ばせる。その外作業館あり職員寄宿舎あり、一寸東京市内の學校も顔負けの體である。此處はもと工科技術者の養成を計つたもので、規模宏壯、當時の國民政府の抱負の程も窺はれる。教授小竹文夫氏から書院の様子を伺つたが、此の大學の一部だけを利用して書院の教育は間に合ふので今の所全部は使ひ切らぬといふ。他の一棟は西部日本小學校が借りて使用してをり、がらんだりの圖書館には我憲兵隊が這入つてゐた。

佛租界祁齊路にある外務省對支文化事業上海自然科學研究所は東大の校舎に似た堂々たる煉瓦建物である。所長新城新藏博士とは初對面ではあつたが、飯島、橋本諸先生と支那天文學に關する論争で吾々は充分雷名を伺つてゐた人、門野幾之進先生の御親戚で塾とまんざら縁故のないわけでもない。小泉塾長の書面を見られて吾々一行には非常な好意を表せられ、南京・杭州の圖書標本接收保存に就ての苦心、希望を語られ、十七日の南京標本接收旅行に吾々の同行を勧誘せられた。之に依つて吾々は最初決めた旅程を變更し南京から先づ調査を初めることにしたのである。

十七日午前七時廿五分上海驛（昔の北停車場）から普通列車に乗つて南京に向ふ。上海から南京までは此外に時間の速いガソリンカーが通じてゐたのであり、特にこれに便乗を許されたが、荷物のある我々は雑沓を慮り普通列車を選んだのである。列車は貨車に支那の四等客車三輛をつないだもので、外側に旅人用とチヨークで記してある。大部分の客は邦人で支那人はごく少しである。蘇州までは例の娘子群の先遣部隊が乗込んでゐたが、その下車した後、〇〇部隊の兵隊さんが乗車した。皆東京兒で頗る陽氣である。東京南部の兵隊さん方は三田といふ名で故郷懐しいらしくいろいろと話しかける。彼等は經濟學部藤林教授の戦友達であり、その噂を聞かしてくれたのも奇縁である。蘇州の驛は爆撃を受けて破壊されてをる。雨のそぼ降る驛頭に主として接客業者らしい國防婦人會の連中の合唱する露營の歌に送られて移動部隊は前線に出發する。勇ましい中にも哀愁を誘ふ風景である。

窓外の景色は九州邊の風景と餘り變りなく、たゞ流石に大平原であり、ジャンクの帆が畑の向ふに隱見する。爆彈、砲彈の穴で満足な家は少い。然し生々しい戦禍の跡に菜種の花は咲き、農夫は平和に地を耕し、子供は線路に駆け寄り、「進上！ 進上！」と手を舉げて兵士が窓から菓子を投げるのを待つてをる。四時二十二分丹陽附近に来て漸く丘陵が近づいて來た。斯くて鎮江を過ぎ南京の下關に入る頃山々は紫に暮れ、暗いプラットフォームには塾員加納氏、研究所の宮地氏の顔が見える。トラックとタクシーとで無氣味な闇の街路を疾驅し約三十分、南京市に入り、軍指定の旅館寶來館といふのに投じ、先

着の新城氏一行と顔を合しホッと一息した。

二、南京の調査

南京に於ける第一着手は國立中央研究院の歴史語言研究所を整理することであつた。此處は中華民國の最高學術研究所であり、支那の中外に誇る文化機關である。本機關の誕生は民國十三年（一九二四）孫逸仙が國民會議を召集して以て國事を解決し、また中央學術院を設けて全國最高學術研究機關となし、革命建設の基礎となさんとし、汪兆銘、楊銓、黃昌穀にその計畫を起草せしめた時に胚胎する。民國十六年（一九二七）國民政府南京に都を定むるや中央政府會議は中央研究院を設立することを議決し、蔡元培、李煜瀛、張人傑を籌備委員とした。斯くて同年十一月籌備會議に三十人餘の委員が相會し、中華民國大學院中央研究院組織條例を通過し、此の研究院を大學院の下に置いたのである。翌年政府は之を修正し、國立中央研究院となし、之を國民政府直轄下の學術機關となし、蔡元培を院長となした。最初天文研究所、氣象研究所、社會科學研究所の法制、民族部を南京に置き、社會科學研究所經濟、社會部、物理、化學、工程の三研究所を上海に暫設した。歴史語言研究所は最初廣東に設置せられ、次いで北京に移り、民國廿一年（一九三二）滿洲事變を避けて歴史部を除いて他は上海に移り、同廿三年（一九三三）南京鷄鳴寺北極閣の下に現建物が竣工するや南京に決定的に居を定めたのである。研究所は三層で

屋根に支那古代風を取入れた折衷式近代建築物であり、利用に氣持のよい點では日本あたりの類似の研究を陵駕してをる。此の建築物は廿二年七月に起工し、廿三年十月に落成し、工費は十萬圓を費してをる。研究所は第一組史學、第二組言語學、第三組考古學、第四組人類學の四に分れ、左の人員から構成されてゐた。

所長兼
專任研究員

傅 斯 年

第一組主任兼
專任研究員

陳 寅 恪

第二組主任兼
專任研究員

趙 元 任

第三組主任兼
專任研究員

李 濟

第四組主任兼
專任研究員

吳 定 良

專任研究員として

羅常培、李方桂、董作賓、徐中舒、梁思永、凌純聲

專任編輯員として

裘善元、郭寶鈞、陶雲達、趙邦彥

通信研究員として

顧頡剛、胡適、陳垣、ペリオ、カールグレン、朱希祖、馬衡、沈兼士、徐炳昶、容庚、辛樹幟、丁山、

フォン・スタエル・ホルスタイン、翁文灝、テイヤール・ド・シャルダン、梁思成、陳受頤、孟森
通信編輯員として

容肇祖、趙萬里

助理員として

干道泉、王靜如、楊時逢、陳槃、劉嶼霞、李家瑞、丁聲樹、陳鈍、李晉華、李景暉、郝延霽、俞大綱、
芮逸夫、勞幹、石璋如、劉燿、李光濤、余遜、陳述、全漢昇

その他書記技術員など十三人餘を含んでをる。待遇は專任研究員が月四百元、專任編輯員が三百元、助理員が百六十元である。またこの外中華教育文化基金董事會は民國十九年五年を期とし中央研究院歴史語言研究所に李濟の爲に考古學の講座を寄附し、年額六千元を提供してをる。

此の研究所が世界の學界に寄與した最大功績は河南省安陽に於ける殷虛の發掘である。一八九八年より一八九九年（清光緒二十五年）にかけ河南省安陽縣の西北小屯子といふ地點で殷代の文字を刻した無數の龜甲獸骨が發見せられ、爾來この眇たる一小村が一躍して内外學者の耳目を集むる所となつたのは人の知る所である。初め小屯の北洹水に沿ふ畑から常に甲骨が農民に依り發掘され、藥店に龍骨として之を賣つてゐた。間もなく北京の蒐集家に知られ、王懿榮、劉鐵雲の蒐藏となり、更に孫詒讓、羅振玉等の甲骨文字解讀となつたのである。外人ではカナダ長老教會の牧師明義士 Menzies が之を集め、一九

一四年には Warner 氏が小規模ながら科學的に發掘したが、民國十七年（一九二八）八月中央研究院歷史語言研究所は董作賓を派して之を實地に調査せしめた。氏は近時出土の狀況を調査し、羅振玉の言ふ所の最早一物も存せずといふ言が實ならざることを知り、十月に試掘をなし、ついに龜甲獸骨を含む沖積層を發見し、文字ある甲骨片七百八十四片其の他の古器物を發見したのである。翌十八年（一九二九）春 The Freer Gallery of Art, Smithsonian Institute の出資を得て李濟を筆頭に董作賓・董光忠その他歷史語言研究所考古部所員總出で發掘を爲したが、殘念乍ら軍事の爲停頓し、秋に至つて再始し、河南省政府の干涉壓迫の爲斷續したが二回發掘を行ひ、村の北に縱溝四、長約四百米、支溝若干及び橫溝七、長約五百米、村の西北に試掘溝三を發掘し、左の點數の遺物を出土した。

字甲 一八六四 龜版 七九三 字骨 八七八 骨版 二三五 骨器 九六五 骨料 一〇〇 獸骨
六六 貝蚌器 九〇九 玉石器 五三二 銅器 一五〇 陶器 二二九 陶片 三九二 金 三 其
他人骨、鐵器、瓷、磚、炭、朱等、

此發掘に依り殷虛の範圍が小屯の村界を超過することが證明せられ、發掘せられた場所の大部分は既に幾度も地層が擾亂されたことを示したが、少し許りの地點に於て幸ひ未だ手を觸れざる殷代文化層が發見された。殊に注目すべきは長方坑及び圓坑の遺址が多く發見せられたことで、中より比較的完全な器物が發見せられ、内部は擾亂せられたること少く、その或者は水面まで達し、且つ人骨を出だす點よ

り、之を悉く貯藏用の穴とは解し難いことが認められた。遺物の中に多數の銅器、その鑄型、銅塊、銅鏃、銅矛、鏃、刀、針、錐等が発見せられ、殷代が既に金屬時代に入れることが確證せられ、また石刀、石斧極めて多く、その外三稜石鏃、雙孔ある半月形石刀があり、石造物の中、新発見のものは腿を抱いて坐する人像で、たゞ不幸にして顔面を缺くもその構造より柱に倚りし人像柱礎の類かと推せられたるものがあつた。石像の外なほ多くの模様ある石塊が発見せられてゐる。陶器の中の最大発見は仰韶式多彩陶器片の確實に殷代と見られる層より出土したことである。

十九年（一九三〇）は出土物の整理をなし、廿年（一九三一）春に第四次發掘を行ひ小屯の繼續調査を行ひ、更に後岡、四盤磨の兩地を調査した。此の發掘より梁思永が、郭寶鈞、吳金鼎、劉嶼霞と共に參加し、また此の年よりアメリカの對支事業である中華教育文化基金會は三年を期とし年々發掘費一萬元を研究所に補助することゝなつた。小屯に於ける今次の發掘に於ては殷人居住の遺跡たる版築址を發見し、また鐵道線路の西紗廠の向ひなる後岡の發掘は白陶、黑陶、彩陶三種文化層の堆積を顯示し、小屯の西約三・四里の四盤磨に於ては小屯に似た遺物層並びに俯身葬の墓一個を發掘した。此季の發掘物は重要品は別として二百餘箱の多數に達してをる。

同年秋、第五次發掘は、董作賓が主となり、大體春季の發掘を繼續し、小屯の北及び村中、後岡の調査を行つた。村中の發掘に於ては地下の堆積が最初の推定の如く漂流に依るものでなく、廢棄堆積なる

ことを示し、また隋墓一個を見出だした。村北の發掘は、下に殷人居住の址なる大圓坑あり、上に版築の居址存するを發見し、また純粹細黄土の臺基の存在をつきとめ、後岡に於ては三種土器文化の年代順が愈々確實なることが認められた。

第六次發掘は廿一年（一九三二）春に行はれ、李濟、董作賓等六人參加し、小屯のB E兩區の規則的發掘をなし、三時期の建築物、完全なる殷人炊爨の爐址などを發見し、且つ房屋の基礎南北に走れることに注意し、百餘箱の土器、骨、石器、貝等を得た。此の時殷墟の範圍を知る爲洹水の北侯家莊を發掘し、土器、骨、石器等十餘箱を得、遺跡が仰韶期、黑陶文化期、城子崖後期の三時期に互れることを知つた。また小屯の南花園莊に於ても、陶器、卜骨等小屯出土物と同じものを發掘してをる。

同年秋には第七次發掘が行はれ、董作賓、李光宇、石璋如の三人が參加し、B E區の外にA C區の規則的發掘を行ひ、長さ廿八米四に及ぶ版築堂基、及びその上に排列した石柱礎などを發見し、また諸種の居穴と堂基との分布關係を益々明かにした。

第八次發掘は二十二年（一九三三）の秋、李景暉、李光宇、石璋如、劉燿の四人に依つて行はれ、小屯D區を發掘し、長三十米廣九米で石礎の外銅鑄礎十個ある版築堂基、及び長二十米廣八米の堂基とを發見し、またその下に黑陶時代の穴居の大圓坑を見出だした。その外また遺址内に多くの隋唐時代の墓葬を發見してをる。

第九次發掘は二十三年（一九三四）春季に行はれ、董作賓が主として小屯遺址の北河濱に至る所にG區を調査したがまもなく侯家莊に於て甲骨文字の出土を知り、同地を發掘し、完全な大龜腹甲六版等重要な遺物を發見し、殷人居住の大圓穴、建築基址、版築石礎、土階、地窖など小屯と同様な遺址を見出した。またその東の武官村に於ても楕圓灰土坑二個所を出だし、甲骨その他小屯類似文化の存在をつきとめた。また後岡の發掘も繼續し、二十二年の秋より二十三年にかけ二回の發掘に依り黑陶（城子崖）文化期の圍墻や銅器殉葬の墓葬などを發見してをる。

第十次發掘は民國廿三年（一九三四）の秋梁思永等に依り侯家莊西北岡に於て行はれた。此邊一面殷代の墓地であり、此處に東西兩區の發掘を行ひ、西區からは四大墓の殷代帝王陵墓と思はれるもの、東區からは六十三の小墓を發見し、その中三十二を發掘し、中に六種の墓制あることを明かにした。遺物としては東區より銅器百廿四、西區より銅器殘片三百餘塊、銅鏃九個、石製品は西區より約千點以上、中に大理石の虎の彫刻の建築物の一部分と見ゆるもの一個を出だし、玉製品は西區より四點、碧玉製品も同所より千餘點（主として象嵌裝飾片）、骨製品も主として西區より花紋ある骨器殘片二百餘片、無花紋骨器七百餘點、骨鏃三千餘點、殘骨器百餘點を出だし、龜版は紅色を塗つた無文字の龜版碎片、八百餘點の牙製品、五百餘點の貝製品、千餘片の白陶片を何れも西區より出土した。西區大墓中に排列された無肢體人頭、及び無頭の肢體骨、東區の小墓中に發見した人頭骨だけ又は肢體骨だけを埋めた墓は何

れも此の時代に於て殉死の盛行を確證してをる。此の時發見された人頭骨百餘個（その中三分の一は完全）、肢體骨數は殷代の人體の研究に重要な資料である。此季に於ては洹水北岸侯家莊西北三里の地點、秋口同樂寨を發掘し、黑陶文化と彩陶文化との重疊堆積の居住遺址を發見してゐる。

第十一次發掘は二十四年（一九三五）春、梁思永等に依り侯家莊に於て續行せられ、西區の四大墓を全部發掘し終つた。亞字形をなした一〇〇一墓は面積四百六十立方メートルに及ぶ最大なもので、地面下約十二メートルで墓底に達し、墓底の中心及び四角に小殉葬坑一を有してゐた。此の墓より遺物を最も多く出だしてをる。他の三墓は平面方形で面積四百立方メートルより三百二十立方メートルに及び、大概盜掘に遭つてをる。なほ此の四大墓の外に漢代塋墓及び殷代亞形大墓各一座を出だしてをる。

また東區に於ては四百十一座の小墓を發掘し、是に十種の墓制の存在を明かにした。遺物としては銅製品に底に象形字ある牛鼎、鹿鼎を始めとして新様式の武器、車飾、鏡、馬絡頭銅飾、戈柄の腐痕あるもの、石製品として西區より大理石の鳥、獸、牛頭、魚、蛙、蟬、雙臉面具、雙獸等二十餘點を、玉製品としては東西兩區より管、珠、魚、玦、璧、環等を、碧玉象嵌裝飾片としては斷片その數萬、骨、象牙製品としては西區より花紋あるもの約千餘片を出だし、陶製品としては西區より白陶片數十片を、東區より小屯式帶釉陶器一點を出だしてをる。また西區より儀仗の痕跡を止めるもの、少數の銅器、骨器、文字ある石製品等を發見してをる。

その外此の年殷墟附近の調査も行はれ、南彰武、洪岩村、南固縣村、北固縣村、寨子(對岸)、夏寒寨、車村、梁村、柴庫、劉莊、西麻水西地、西麻水東地、東麻水、大正集、永安寨等十五ヶ所を發掘し、一ヶ所は彩陶と黒陶との兩期文化遺物、四ヶ所は黒陶時期の物、三ヶ所は黒陶、灰陶兩時期の物、七ヶ所は灰陶時期の物を出だすことを明かにした。

第十二次發掘は二十四年秋季に梁思永を主任とし、侯家莊西北岡を前期に續いて發掘し、西區に於て春季に發見された大墓一座、及び今季に發見せられた二大墓及び一假大墓少數小墓を調査し、東區に於ては大墓二座、小墓七百八十五座を發掘し、九種の新墓制を加へ、遺物として銅製品に人面具、罍、尊、盃、盤、勺、鸚尊、牛爵、提梁卣、弓背飾、馬飾等、石玉製品には白大理石の獸類彫刻、尊皿、短几、門白石の如き用器、碧璧、璜、珩等の如き禮器、石磬、石埧の如き樂器、筭、冠飾、佩玉類の裝飾品等を、碧玉象嵌品としては馬飾、弓背飾、礪石、銅爵杯、貴婦人の冠飾等を、骨製品としては少許の頭飾品を、また儀仗の痕跡を止めしもの、文字ある銅器十餘點等を出だしてをる。

つゞいて第十三次發掘は二十五年(一九三六)春郭寶鈞、石璋如を主として小屯に於て行はれ、完全な殷代房屋の基址たる版築台基三座と百二十七の小灰土坑を發掘し、後者より十萬片の土器片を得、その外に車馬坑、殺頭之俯身葬群、水溝、完全な龜版の堆積坑を調査した。

以上が此の研究所の殷墟發掘の略述で主として中央研究院各年度報告により紹介したものであるが、

此の研究所の此の外今一つの業績は城子崖の發掘である。此城子崖の發掘は河南仰韶の發掘が西人により手をつけられ、安陽殷墟の發見が偶然的であつたに反し、當初より支那學者に依り系統的に調査せられた點に於て中央研究院の誇とする所であり、「城子崖」といふ豪華版の報告が中國考古報告集の一として民國二十三年（一九三四）に出版されてをる。城子崖は山東省濟南の東約七十五支里、山東鐵道龍山驛の北一支里の所に位し、吳金鼎が民國十七年（一九二八）に平陵調査の途次發見せし遺跡である。中央研究院は山東省政府と共同して十九年（一九三〇）山東古蹟研究會を組織し、同年十一月、李濟、董作賓、郭寶鈞、吳金鼎等發掘に當り、四十四のトレンチを掘鑿し、二萬三千八百七十八個の標本を採集した。之を内約すると陶器及び陶片二〇、九一八、骨角器一、八六四、貝器八四七、其他（石器を包括す）二四九であり、その外少からざる人骨と獸骨とを得た。更に翌年十月第二次發掘をなし、梁思永、吳金鼎、劉嶼霞等之に當り、四十五のトレンチを掘り、六十箱の遺物を得た。

本遺跡は三層の台地から構成され、その第二、第三は河成台地であり、最高台地だけが文化層である。此の文化層の本身は灰褐土であり、深き所が黒陶を出だす層で、淺き所が灰陶を出だす層である。初めは現在より低かつたのであるが、此處に黒陶使用の人民が來り、散點的居住をなし、周圍に城牆を繞らした。次いで灰陶使用の時期に至り、人口は稠密となり、全址上に擴つたのである。地下より一・五又は二米の所に遺物なき砂層及び黃土あり、黒陶文化の廢滅した後一時人烟稀少か又は絶無の時代があり

しことを示してをる。灰陶文化の廢滅した後周圍の城牆漸次壞れ、表層を作り、中央部が凹み周圍が高い現在台地を形成したのであると云ふ。

建築の遺留として南北約四五〇米、東西約三九〇米の城牆が残つてをる。これは初め廣一三・八米、深一・五米の圓底基溝を作り、黄土を以て之を滿し、その黄土中には石を交へて堅固ならしめたもので、その基礎の上に牆の本身を厚さ〇・二―〇・一四米毎に三糎づゝ後退する斜面で堅く築き上げてをる。今日上部は崩れて原型を保つてゐないが、一個所外部に堆積してをる黄土から推定して約九米と算定される。幅は牆基に於て一〇・六米であり、高六・五米の點で九米の幅である。遺址の中より六の窯址を發見したが、その中五は城牆に接して作られてをつた。此の窯の構築されたのは城子崖後期である。

陶器片の中四九・二パーセントは手づくねで四五・五パーセントが轆轤製であり、手づくね製陶片の二四・五パーセントが外側に蓆紋及び籠目紋あり、その製作過程を暗示してをる。此の陶片は下層に至るに従ひ増し、轆轤製の陶片は上層に至るに従ひ増加する傾向で陶器の質は白色磁に似たるもの(A)と砂と泥と交りたるもの(B)と、泥質のもの(C)と三種より成る。Bは六九パーセントを占め、下部より上部まで分布し、Cは三四パーセントを占め、下部の上層に最も多い。色は白、灰、黒、紅に大體分れ、その中でも黒色陶器は滑澤あり薄く堅剛で優秀な製作である。陶器の裝飾模様は蓆紋及び籠目紋が最も多く、轆轤に依る輪紋が之に次ぐ。刻紋は印紋、指甲紋などと共に其數餘り多くない。

城子崖の陶器の優つてをるのは裝飾よりも寧ろその形式で蓋にも足にも様々な種類があり、百に満たざる完器が様式から言ふと二門、九式、三十五類に分類せられると言ふ複雑さである。此の陶器類を時代と作風から區別すると左の四系となる。

一、第一灰陶系（遺址の下層にあり）

二、黒陶系（遺址の下層）

三、黄陶系（遺址の下層）

四、第二灰陶系（遺址の上層）

石製品は陶片と比べると三百二片でそれほど多くなく、礪石、磨石、石槌、石斧、石鏟、石庖丁、石鏃の類であり、骨器も二百四點で鑿、錐、針、梭、筭、鏃、魚叉の類である。角器は鹿角を使用し數少いが、貝器は鏟、刀、鋸、鏃、環の種類に分れ、城子崖文化の一特色を形成してをる。

なほ本遺跡からは牛鹿の肩胛骨に依る卜骨十六點を出だし、此の骨卜が中原に於て普遍的な卜法であり、此點東亞其他各地民族共通した所あり、殷墟より發見せられる龜卜も結局此の卜法より導かれて發展したものなることが明瞭に證明された。

中央研究院歴史語言研究所はその外十九年に梁思永を滿洲に派遣し、黒龍江省の昂昂溪及び熱河省の查不干廟、林西、雙井、赤峯等の新石器時代遺址を發掘調査せしめてをる。また山東に於ては吳金鼎が

二十年秋魯東を二十一年の末魯南を調査し、二十二年の春には濰縣、淄川等を探り、同年秋董作賓、王獻唐が濰縣の東三十里の安上村で殷周時代の文化遺跡を發掘し、その村の東約十里の曹王墓と稱する盜掘に遭ひたる墳墓群を清掃した。二十三年春には山東古蹟調査會は魯東を調査し、二十五年には梁思永、劉燿等が日照兩城の發掘を行ひ、黑陶遺品と其の時代の墓葬とを發見してをる。

河南方面に於ては二十年春濬縣の盜掘事件起り、郭寶鈞等が同地の正式調査をなすこととなり、辛村に於て盜掘された二陵墓と及び一住居址とを發掘調査し、その東南約七里の濰河の沿岸なる大賚店に於て仰韶期と黑陶期の遺物を包含する古村落遺址を發掘し二十一年秋には濬縣第二次發掘をなし、大墓六、小墓五を清掃し、その中一車馬葬坑から多量の犬骨、車、馬骨を發見した。之が最初の分部殉葬の發見例である。二十二年春第三次の發掘に於て十八の墓を清掃し、一完全小墓を發見し、多くの銅器、貝器類を得た。また淇莊淇河北岸に於て仰韶文化の一遺址を發見してをる。同年秋第四次の發掘は五十餘の墓葬を清掃し、衛伯宗伯の文字ある銅器を發見し、本墓地が周初衛國の墓地であることを證據だて、また辛村の南にも黑陶の遺址を發掘調査してをる。同年夏には董作賓に依り洛陽の漢墓の畫像石が調査され、同年冬には劉燿に依り濰縣に於ける殷末より春秋戰國時代に亘る遺址が調査せられた。二十三年夏には郭寶鈞が主任として黄河の南岸鞏縣馬峪溝附近を調査し、彩陶遺址五ヶ所黑陶遺址一ヶ所を見出だしてをる。

山東河南の外に安徽の壽縣にも二十三年の冬、李景暉、王湘の二人が派遣され、前年の春朱家集村で楚の大古墳が盜掘された其の跡を視察し、且つ附近に於て二十ヶ所の小遺址（その中秦以前が十二、漢以後が八）を發見した。

大約以上の様に所員が連年各所を發掘調査したその出土遺物を集め整理してゐたのが本研究所考古學研究室であるから如何にその標本が豊富であり、且つ重要なものであるかゞ明瞭であらう。南京陥落前から本研究所は支那軍の防空司令部の爲使用せられ、中央研究院の背後には立派なコンクリートの防空壕が作られてゐた。従つて標本の中の重要なものはいち早く持ち出され、所員は他に避難したらしい。我軍の空襲によつては建物に被害がなく、たゞ附近の地上に爆彈の跡があるだけである。陥落の際は相當うろたへ且つ便衣に着更へて逃走したと見え、屋根裏などには正規軍の衣帽類が散亂し、小銃彈なども各部屋に散らばつてゐた。我軍入城後は一時〇〇部隊の司令部となつてをつたが同隊の移動後嚴重に封印せられ、標本類はそれ程散逸はしてゐない模様であつた。

五月十七日新城博士の先導に依り吾々一行が此處を訪れた際には入口に封印が施してあり、鍵は特務機關にて保管中であつた。開封して中に入つてみると、標本箱は覆され、書類はうち棄てられ、塵埃と混じて足の踏場もなく、之を清掃し、貴重品を選び出す仕事は全く一通りの勞苦ではなかつた。最初の日には一行の勤勞奉仕で一階右翼の土器室を清掃したが、次の日からは苦力を使ひ、連日バタ屋のやう

な清掃作業を開始した。塵埃は濛々と立籠め、不用物を裏庭で燃すと不發の小銃彈がボン／＼爆發するなど一寸戦地でなくては見られぬ光景であつた。

整理の結果大體次のことが判明した。第一階の東は考古學標本整理室で、山東城子崖、日照兩城、河南安陽附近、安徽壽縣その他各地の土器標本それに石器類が藏せられてをる。その隣室は董作賓の研究室なりし如く同氏の手稿類が散亂してをり、吾人は之を一括して本箱中に收めた。

第二階の東の二室も考古學の研究室であり、中には安陽殷墟發見の遺物、土器片、甲骨片、骨鏃、骨器、子安貝、貝器、裝飾石片、青銅屑の類が包藏されてゐた。たゞ殷墟發見の精華と言はれる銅器、玉石器、文字ある龜版獸骨類は所員が全部持ち去れる如く、棚に空箱が残つてゐるだけで目星しい遺品としては青銅利器の殘片や、銅鏃、鐵鏡、鐵鋏、石杵其他石製品等の類があるに過ぎなかつた。また殷墟より近年發見せられた柱礎の裝飾と考へられる大理石製の虎に似た獸の坐像二個が存してゐた。之は殷墟新出土の支那最古の彫刻品として評判のものであるが殘念ながら二品共模型である。

第三階の東端は防音装置ある言語學研究室であるが、機械類は一物も止めてゐない。支那軍が此處を使用する爲いち早く運び去つたのであらう。然し壁は全部防音装置のある立派な部屋である。その西端は人類學の研究室で中に約百三十個の支那人頭骨を分類保存してある。その中には現代のものもあるがまた殷墟發見各時代の頭骨を含んでをる。その外に下顎骨百四十四例、四肢骨多數を有してゐた。一體

此處の人類學的工作は最初民國十七年廣東に於て Shirokogoroff (史祿國) 教授がその任に當り南部支那人身體發育の問題を研究し、北京に遷つて後は民國十八年吳金鼎等が山東その他の人體を測定をなし、二十三年社會科學研究所民族學組を合併して第四組(人類學)を作るや最初李濟ついで吳定良が主任となり、吳は小屯發掘隋唐時代の頭蓋骨二十餘個全身骨骼十餘個を測定し、また支那人の手掌及び指紋、四川人の體質、兒童體質の發育の問題などを研究し、二十三年と二十四年に亘つて陶雲逵、趙至誠が雲南の人種を測定調査したのである。さういふ所員達の手記類は殆ど室内に残存してゐない。

屋根裏第四階の西端は民族學の標本室で、中にシベリア赫哲 Golts 族を主とし苗族などを含む約二百五十點の土俗資料、またその側室に臺灣生蕃及び本島人の土俗品三十點餘を藏してゐた。此の民俗品の中赫哲族のものは初め社會科學研究所々員であつた凌純聲が民國十九年商承祖と滿洲に赴き松花江下游の赫哲族を三ヶ月調査した時の材料であり、此の時の資料を整理して二十三年に「松花江下游的赫哲族」といふ上下二卷の大冊が公刊され、支那民族學の爲に萬丈の氣焰を吐いてをる。また臺灣の民俗品は同じく社會科學研究所の助理員であつた林惠祥が民國十八年に臺灣を旅行して得たるものであり、十九年に「臺灣蕃族之原始文化」と云ふ報告が社會科學研究所專刊三號として公けにされてをる。一體民族學は初め社會科學研究所に於て研究されてをり、十八年に同所專刊第二號として顔復禮、商承祖編の「廣西凌雲嶺人調査報告」が公けにされ、二十年にはその特約研究員 Uebel (史圖博) が海南島の黎人を、

二十二年には凌純聲、芮逸夫、勇士衡が湘西の苗族を調査した。二十三年歴史語言研究所に合併され、同年夏には前記三人が浙南の畚民を、同年秋には雲南の諸民族を調査研究した。我國に於てごく少數の大學を除き學問的に無視されてをる民族學が支那に於て比較的重要視されてをるのも此國の學問の近代性を語るものであらう。

本館の後に倉庫と工人の宿舍に用ひられた家屋が存してをる。予等の一行の訪れた際その西端の室内に若干の殷墟發掘品貯藏木箱がなほ放置してあつた。なほその後の小山の中腹に茅屋ありこの中にも矢張り殷墟出土の人骨が一杯詰つてゐた。此等の標本は皆喪失の憂があるので一時本館の中に運びこむことゝなつた。

歴史語言研究所の西北少し高所に地質研究所の建物がある。同研究所は初め上海の Avenue Joffre (霞飛路)、次いで曹家渡にあつたが二十一年此地に十三萬三千元の工費で起工され、二十二年に落成したものである。五月十八日新城氏一行と此處を訪れた際化石鑛物標本は目茶苦茶に散亂し、階下の室内に猫が子を生んだりなどしてゐたが、其整理は次回に専門家の手に待つこととし今回は手を觸れなかつた。

歴史語言研究所の東南にあり入口の正面に面してをるのが舊社會科學研究所の建物で、これは民國二十年(一九三一)六萬餘元を投じて建築されたものであり、二十三年同研究所が一時北平に移るや心理研究所に譲られたものである。中央研究院總辦事處も二十四年成賢街の舊址を中央圖書館籌備處に譲り

新館の出来るまで此處に一時宿を借りてゐた。吾々が訪れた際は同所は〇〇部隊の宿舍となつてをり、中にあつた書類などは多く處分に困つて焼いたさうである。

歴史語言研究所の西南、道路に面して建設せられてをるのが二十四年に起工し二十五年（一九三六）に落成した新装の社會科學研究所であり、中に中央研究院の總辦事處も設置せられてゐたのであるが未だ完全に落成しない中に事變になつたものらしい。然し吾々の見た時には中に少數の書物が散亂してをるに過ぎず、難民の爲にあらゆる裝備は盗み去られてゐた。

南京の東南復成橋のほとりクリークに沿ふて陶瓷試驗所の建物が存在する。これは中央研究院工程研究所が十七年に中央大學工學院と合辦し工業學校の舊址に建てたものである。建物は大したものでないが此處に中央博物院の籌備處が置かれてゐたらしい。一體北京政府教育部により歴史博物館籌辦處なるものが出來たのが民國元年（一九一二）であり、初め北京國子監に設けられ七年（一九一八）に故宮天安門内に遷り十八年に中央研究院の管轄に歸した。そして朱希祖を常務委員長とし、傅斯年、裘善元を常務委員、陳寅恪、李濟、董作賓、徐中舒を委員とした籌備委員會が設けられたのである。此處で蒐集せられた古物は二十三年度に二十一萬六千七百一點に上り、北京午門内に陳列されてゐた。滿洲事變當時よりその中の貴重品は之を荷造りし南京に送りつゝあつたのである。中央研究院は南京に國立中央博物院を建てる計畫で二十三年に九萬元を支出し南京中山門側に地を購ひ、二十四年にも建築費として九

萬元を繼續支出してをる。今日中山門の傍に立腐れになつてをる鐵筋コンクリートの大建築がその名残りである。この中央博物院籌備處は歴史語言研究所の一階に一室を借りてゐたらしく同博物院の設計圖が十葉ばかり發見された。之によると人文館のみならず、自然館や工藝館の部門もあり、可成壯大なものにする豫定であつたことがわかる。この中央博物院籌備處は陶瓷試験所の一隅をも借りて倉庫としてゐた様で、此處に北京より送られた考古學標本、工程模型標本、清朝歴代殿試策及び動物の剝製標本類が置いてあつた。然し最も數の多かつたのが歴史語言研究所の考古學組で連年發掘した安陽其他の出土遺物を入れた多數の木箱である。本試験所は故宮飛行場のそばに位する爲か殊に戰禍を蒙り、後方の數棟は燒失し倉庫は屋根に爆彈を受けて壁は崩れ瓦は落ち慘憺たる状態を呈してゐた。その上殊に殘念であつたのは難民がこの木箱類を掠略に來てゐたことで、満足なものはごく少く中の遺物が山の如く散亂して足の踏み様も無い程であつた。兵站司令部から借りたトラックで散亂せる遺物をかき集めかういふ箱類を悉く歴史語言研究所に運ぶのが先づ何より先の仕事であつた。箱數は四百六十數個に達し、之を歴史語言や地質研究所に残してあつた同種の箱類と合せると全部で七百四十數個の多數に上つた。然し中に這入つてをるものは主として土器片、石器片、骨器片、瓦片、骨片等で完全なものはごく僅かであり、難民掠略の殘滓であることがはつきり了解される。またその外木箱入の佛像類や石刻類が發見せられたが殊に吾人を驚かしたのはこの倉庫の東の室に剝製標本を入れたガラス箱が澤山あり、その側に三

十餘の包みが重ねてあり、土囊と思つて足で蹴ると中から石佛類があらはれて來たことである。之等は何れも研究所に遷し大切に保管することにした。

今一つ矢張り此處に放置されてゐた標本の中に清代歷朝の殿試策があつた。これはもと北京歴史博物館で藏せるものであり二十一年に之を整理し、一萬五千二百三十七卷に及び、二十二年南京に移送せるものである。陶瓷試験所にあつたものはその何分の一であるかは不明であるが、兎に角夥しき數に及び之を皆研究所に送り今二階の西の一室に保管してある。陶瓷試験所に久しき間放置してあつたのでその一部分は雨に遭ひ腐つてしまつたのは残念である。

陶瓷試験所で發見された標本の中顯著なものを擧げて見るとその一は景教石刻である。之はもと河北省房山十字寺にあつたもので此處に置いておくと外人に取られる心配があると云ふので二十年（一九三一）北京の歴史博物館に移したものである。寺は房山縣を去る十八支里の山中にあり宛平縣の管轄に屬してをる。この二石が碑座に似てをるので館員がその邊を發掘して石佛一座を發見し、また東の墻隅で「十字禪林」の石額をみつけ何れも一緒に北京に持ち歸つた。之を爾來歴史博物館内に陳列してゐたのであるがその中こつそり此處に移送して來たものである。

その外此處で發見せられた石佛類は陶瓷試験所に散亂してゐた「繪園藏古錄」といふ小目錄に登載されてをるものが多い。此目錄には一々値段が記してあるから繪園と云ふのは骨董屋の名らしいがこれが

歴史博物院籌備處に保存されてゐた理由は不明である。恐らく之をやがて開館さるべき博物院に陳列する豫定であつたと考へられるがそれにしては偽物のまじつてをるのは不思議である。多分玉石混淆のコレクションを買つて他日に備へるつもりであつたらうか。また今一つの疑問は「繪園藏古錄」に見ゆる小物件を入れた箱が陶甃試験所に於ては殆んど見つからなかつたが、南京の泥棒市場にそれらしい物が現はれてゐることである。恐らくさういふ古玩品をいれた箱類が此處に包藏されてをり、吾々の來る前にいち早く盜み去られてしまつたものであらうか記して後考を待つこととする。

陶甃試験所に程近い所に古物保存所がある。即ち故宮飛行場に沿ひ、導淮委員會や蒙藏委員會などの前を過ぎ中山東路の大通りに出、右折して中山門の方に出るとその右側道路に面した所に位置してをる。このあたりは昔明太祖が宮殿をつくつた地點に當る。古く此邊は燕雀湖といふ湖水のあつた所で太祖は之を埋め、宮殿を造つたと云はれてをる。然し今日殆んど當時の面影を止めない。たゞ秦淮河畔に半ばくづれた西華門があり、更に飛行場の北側を少し行くと西長安門、又之と向ひあつて東長安門、また此兩門の中間南方に向つて午朝門が存在してをる。午朝門外から正南に古の洪武門即ち光華門を望見するこゝとが出来る。東長安門も午朝門もすつかり補修されて新しくなつてをるが西華門だけはなほ舊態を保存してをる。然しこれが必ずしも明太祖の築造したまゝのものでなくたゞ古の故宮の規模を知る上に役立つものである。吾々一行が古物保存所を訪ふた際〇〇部隊の兵が監督で俘虜を使用し西長安門の取毀し

中であつた。なんでも此門の存在が悪氣流を生じ、ダグラス機の着陸に不便だと云ふので取拂ひ、その煉瓦で附近のクリークを埋めさせ飛行場を擴張するつもりなのであると云ふ。そこで吾々は早速歎願書を作り史蹟として西長安門の保存を請願し各方面の諒解を求めたが、結局取毀し中であつた西長安門は遂に全く影を没し、たゞ最初の計畫に含まれてゐた他の二門東長安門や午朝門までも取毀し、古物保存所の建物も撤廢しクリークを埋めその邊一帶を平蕪にする案だけは暫く取止めとなつたと云ふ。之によつて明の故宮の規模だけはなほ今日も偲ぶことが出来るのである。午朝門の外に外五龍橋あり門内に内五龍橋が存する。此處は昔の前庭であつたので橋は赤い血管の様な條痕のはいつた大理石質の石材を用してをる。昔このあたりの草叢に同質の石礎が存在してをり、赤い條痕が血痕に似てをる所から里人が之を方孝孺の血石と傳え遂に左宗棠の立碑に至つたものらしい。方孝孺は明の忠臣で二代惠文の侍講であつた。帝の叔父燕王が北京に兵を起し南京を陥れ帝位を篡奪した時、孝孺に命じて登極の詔を草せしめんとした。孝孺は筆を投じて慟哭し順逆を論じ大いに燕王を罵倒したので、燕王の逆鱗に觸れ磔刑に處せられ一族數百名及び門下生約八百之に殉じたといふ。傳説は孝孺此時舌を噛み切つて死しその血が宮殿前の階石の上に流れて今に痕を存すると附會した。さういふ巨石が四個奉天殿址の草間に横たはつてゐたので、光緒七年左宗棠が兩江總督たりし時殉難忠臣の祠を立て石を旁に移し亭をもつて之を覆ひ、また血蹟碑を立て、由來を記した。辛亥の革命に當り亭祠悉く焼けたが碑と石は共に恙なかつた

ので、民國四年（一九一五）江蘇省長韓止叟舊基により南京古物保存所を建て血石を樓下に移し、左宗棠の碑をその中央に置きもつて今日に及んだのである。即ち古物保存所は全く血石を中心として建てられたものである。其後保存所は主として南京に關係ある古物を蒐集し、ついで江蘇の碑拓などを搜集し、殊に古瓦のコレクションを以て著名であつた。初め江寧府に屬してゐたが國民政府の成立と共に國立となり教育部に屬し、ついで二十五年南京市政府の管轄に遷つた。衛聚賢が十七年度教育部々員としてその主任となり、十八年明故宮侯家塘の池中に早りの時博木を出だしたるよりその發掘をなし、磁器、古錢、木質腰牌等を得、また同年山西万泉縣の石器時代遺址を調査し石器、土器等を多數得、十九年には棲霞山甘家巷附近の六朝墓三個を發掘し銅鍋、銅釘、鐵釘、磁器、明器等を得、且つ墓前より石器土器片を發見した。かういふ發掘によつて古物保存所の蒐集はその數三分の二を増したが、同年衛聚賢は主任をやめ棲霞山調査報告は未發表で終つてしまつた。

今次の戰爭に會し本所は中山東路の道路に面しをる爲人目を惹き易く、土器陶器類は掠略破壊せられ古瓦類其他も難民の爲持ち去られ、たゞ大なる石類及び持ち運び不便な博瓦類が残されてゐた。室内は土器破片類が山の如く散らばり二階には紙片拓本類が散亂し、明器類などは完全なものもなく鑑鏡古錢類なども片影を見るを得なかつた。要するに陳列品の中持ち去り難き金石博瓦類の一部を除いて大部分の品は戰禍を蒙り喪失してしまつたのである。吾々はこの古物保存所の石瓦類をまづ小なるものから中

中央研究院歷史語言研究所に運び移すことに全力を注いだ。かうした努力によつて吾々は世間に全く貴重物が壊滅に歸してしまつた様に傳へられてをる古物保存所の蒐集品の最も重要な部分を幸ひに湮滅より救ひ出すことに成功したのである。たゞ残念なのは石器土器片類は床上に散亂し棲霞山出土のものとして山西万泉縣出土品とは區別を付け得なかつたことである。なほ此古物保存所より中央研究院に移送した標本の中主要なもの若干を舉げてみると、その一は梁蕭秀の石闕頂盤の天祿獸である。南京には南朝の齊や梁の陵墓が存在しその墓前石刻は六朝藝術の粹として著名であるが、その中堯化門東清風郷甘家巷なる梁散騎常侍司空安成康王蕭秀の墓は墓前石刻を保全するものとして有名である。その右の石闕の頂盤上に踞してをつたのがこの天祿獸であり、先年雷震に遭ひ地上に墜落してゐたのを江蘇省長の韓止叟が民國十三年保存所に移したものである（盤徑〇・八五五米、厚〇・一三米、獸高〇・五八米、長〇・六米、前方部 幅〇・三二米）。

南京に於てこの外吾々は市内外の史跡を見てまはつた。その中棲霞山及び其近傍に六朝墓を訪ねたのが私共の收獲の一であるが此行は柴田氏のたてた計畫プランであり、それに就ては同班の報告記事があると思ふので自分はごく簡単に之を記するに止める。

五月三十一日午前八時兵站の前に集合し、トラックに乗り、六人の護衛兵と共に目的地に向つた。自動車は中山門を出で、左に紫金山を見、アスファルト道を疾驅する。蔣介石政權の残した置土産で道路

だけは可成よい。麒麟門で左折し、堯化門車站に至る。此處から線路に沿ひ東走すればよかつたのであるが運轉する兵が自重し、轍の跡を追ふたので道を失し、烏龍山砲臺の附近に出た。道を變じ右折して棲霞山に至り、先づ棲霞寺を訪れる。新しい建築であるが宏壯な構へであり、寺の前に唐明徵君の碑あり、寺の後にまはると例の隋仁壽三年建と云ふ舍利塔が石柵に保護されて立つてをる。幾度か破損しまつた修補せられたらしく附近にはその残石らしいものも落ちてをる。その傍に三聖殿といふ南朝時代の窟殿あり、前立の二菩薩像は後世の修補ではあるが、首以下は昔の儘らしく本尊大佛の臺座の褶襞と共にそのかみの面影を偲ばせるものがある。然し周圍にあるその外の窟は皆後世の改修で見べきものはない。寺の客房で晝食し、次でもとの道に引返し、六朝墓を蕭侍中景、始忠武王蕭憺、鄱陽忠烈王蕭恢、安成康王蕭秀の順序で見てゆく。蕭景の神道碑は田中に立つてをり、以前には着色を施してをつたらしくその痕が指摘出來得るのは珍らしく感ずる。その傍に之も半分田中に没して石獸が残つてをる。その外にも石獸の殘石一個が見うけられる。それから更に西進すると碑亭の中に蕭憺の碑が立つてゐる。その前に石獸、一は首を失し、他は原型を認得し得ざる體で横たはつてをる。またその外に龜趺の殘石らしいものもある。之と接近してをるのは蕭恢の墓で二石獸相對してをり、一は割合に完全であるが他は首が縦に裂けてをる。最も完全に残つてをるのは甘家巷街衢内に石垣をめぐらして保存してある蕭秀の墓で石獸一雙、龜趺一對、墓闕一對、碑一對が存してをる。

此等の六朝墓に就ては張璜の *Tombeau des Liang (Variétés Sinologiques No. 33) 1912* を始め、朱偁の「建康蘭陵六朝陵墓圖考」民國二十五年、中央古物保管委員會の「六朝陵墓調查報告」民國廿四年等が公刊せられてをり、我國の學者の之を訪れしもの多いがその正確な調査は猶今後に俟つべきものである。

南京滞在中晝間の勞働に疲れた私共を醫して呉れたのは薄暮研究院からの歸途新民街より莫愁路にかけ難民區に開かれてをる泥棒市場の骨董店を冷かすことであつた。南京の各博物館研究室は難民の爲に掠奪されその贓品らしい骨董品が此泥棒市場に賣買せられてをる。かやうな標本を安價に買ひ求めて研究資料にしたいのが吾々の希望であり、幸ひ此希望は可成達成せられた。最も收獲のあつたのは漢の瓦當であり、漢の明器類も相當多く、殷墟出土物、唐の土偶、宋瓷類なども蒐集することが出來た。之を十數個のビール箱に入れて研究室への土産とすることにした。然し之を上海まで出す爲には軍用列車では荷物を送り得ないので私と保坂君とは日清汽船の大吉丸に便乗し、荷物と共に長江を下ることにした。柴田班は予等の整理中主として南京及び其附近の古蹟を探り、また蕪湖にも行かれ、更に鎮江及び蘇州を経て陸路上海に歸られるので、予の班の西岡君及び通譯の原口君を同行して載くことにする。

六月三日夕、下關で大吉丸に乗船する。一等の切符を買つたがそれは船と何等の連絡なく下關の事務所で發賣したものであり、乗船して見ると一等は蕪湖からの客で満員であり、殊にカトリックの宣教師が大部分を占めてをるのでどうにもならぬ。やつとのことで支那人一等と云ふのを空けて貰ひ漸く割込

む。船は明治三十四年の竣工とか云ふ實に前世紀の遺物式のボロ船である。愉快な船旅を夢想してゐた吾々は忽ちにして現實暴露の悲哀を味つた。之も戦時中であらうとも仕方ない。

船は翌日未明出帆、鎮江に向ふ。悠々たる長江の流れを下るのは久し振りなので自分としては非常な悦びであつた。西岸には緑の平野連り、戦争と云ひ状、のどかな景色である。まもなく鎮江に着く。金山寺の塔の聳え岬角青く河中に突出してをる港の風情は中々美しい。數隻の我軍用船が黒煙を吐いて堂々碇泊してをり、武漢作戦を前に控えて港に何となく活氣がある。江陰で封鎖して外國商船の溯航を許さぬので一隻の外國旗を翻す船も無い。大吉丸の船尾にはためく日章旗の下に蕪湖から乗つた八人ばかりの外人宣教師が黒い僧服に身を固めて悄然と陸地を眺めてをる。彼等は蕪湖を去つて廣東省に新しい天地を求めに行くのださうだ。各國人から成つてをるが彼等の胸中を思ひはかるとそゞろに我國人の責務重大を感ぜざるを得ない。今から一世紀前阿片戦争をきっかけとして爾來此長江筋に白人の投じた莫大の資本とその努力は全く驚くべきものがある。日本は大なる犠牲を拂ひ此長江を占領したが長江筋まで一手に押ふる程の實力は出來てをるのであらうか。自省の暇もなく時局と共に日本人は無我無中に此大責任を脊負つてしまつた氣味がある。然し之程踏み固められた白人の地盤の上に邦人は餘程の決心と努力とを以て邁進せざる限り、有終の美をなし難いであらう。何れの日か此困難を押し切つて新亞細亞建設の大理想を實現し得るであらうか。吾人は此長江を中心として將に展開されんとする世界史的ドラ

マに本國の人々各自が其舞臺人たることをもつともつと明かに認得して欲しいと思ふ。

ニューズ寫眞で御馴染みの砲臺の見ゆる江陰に来て汽船はまた碇泊した。南京から乗船した我兵若干名は行先を祕して教えなかつたが此處で下船し、殘敵掃蕩の爲北岸の河霧の中に消えた。支那ジャンクが集つて来て鶏卵、落花生、豚等の農産物を積込むので大變である。その鶏卵が腐敗して臭氣が鼻をつく。何處の港に來てもジャンクが苦力を乗せ、汽船の周圍に集り、荷物のあげおろしをしてをるが無關心な彼等の顔には爲政者の變つたことも半ば諦めた色が浮んでをる。治者が微動だにせざる實力さへあれば彼等の支配は案外やさしいのではないかと思ふ。然し此度の事變で職を失つた無數の支那新興インテリ階級を如何にすべきやは今後の大問題である。

夜は危険なので船は航行しない。従つて南京上海間は非常に平常と違つて手間どり、鎮江に一泊、江陰に一泊し、上海に着いたのは六日の午前十一時であつた。

鎮江で宣教師を無理に追ひ出し一等室にかつぎこまれた赤痢で瀕死のデンマークの老人は船が上海に着く一日前に遂に息を引取つた。その檢視を待つて船が入港しても中々上陸出來ない。防疫設備も無いのかういふ人間を乗せる船長も氣が知れぬが、それより困つたのは船が着いた所は上海のづつとはづれ、大日本紡績工場の前で其處から上海の中心までランチに乗らねばならぬ。最初に來たランチは三等の支那船客が黒山の様に乗つてしまひ、吾々は仕方がないので次のランチに乗らうとしたがそれがいく

ら待つても來ない。船長は平服に着換しさつさと最初のランチで上陸してしまつてをる。責任者として
は一人の若い事務員が残りてをるに過ぎない。午前十一時に着いて夕暮まで待ち、はしけを曳いて漸く
やつて來たランチに乗り、郵船碼頭に上陸した時は既に日はとつぷり暮れしとく、雨が降り出してゐた。
實に此船員達の呑氣さは私共を憤慨措く能はざらしめるものがあつた。

三、杭州の調査

私共に一日遅れ柴田氏一行が上海に歸られ、一緒に司令部に本郷參謀や井場囑託を御訪ねし、種々打
合せをなし、九日愈々杭州調査の途に着くことゝなつた。然し此日は一端汽車に乗込みし所、鐵道が嘉
興の先で破壊せられたと云ふことを聞き、一先中止して宿に歸り、翌日の汽車で杭州に向ふことゝなつ
た。窓外の景色は不相變表面平和な田園風景である。然し嘉興を過ぎ硤石附近に來ると流石に敵の襲撃
を警戒し、線路沿の樹木は伐採せられ、停車場は土囊が積まれ、相當警戒が嚴重である。かういふ所に
配置せられた守備隊の辛勞はまことに察するにあまりある。杭州附近の農家の形式は日本式で中支と我
國との關係の濃いことを吾々は今少し科學的に研究する必要があると切實に感ずる。杭州に着き兵站の
トラックで先づ〇〇兵站にゆき、次いで司令部を訪ひ、最後に湖畔なる新々旅館に宿することゝなつた。
岸に蓮花の咲き亂れた西湖畔に立つと四周の丘が雨に煙つて晝の様である。何處かで鶯の鳴聲がす

る。湖水を一直線に横斷してをる長堤には揚柳が青く、湖畔には兵隊さんが支那人の子供と遊び、圓頂黒衣の僧侶が往來してをる。まるで京都と天津とを一緒にした様な杭州の風景は故國の風光を見る心地して嬉しい。石灰岩の突兀たる山が湖水に浸され、丁度南畫の様な風景を形成してゐる。それに戦禍を受くること割合少き此市府は昔の儘の接客設備を残し、その和やかな風光を感賞させてくれるのも有難い。然し建物は前の儘だが中の人は變つてをる。例の新々旅館は軍指定旅館となり、長崎の人が經營してをり、吾々もその西湖に臨むベットも洋服ダンスも在來の儘なる絶佳の一室に陣取ることが出來た。杭州は私の今まで経過した町の中最も平靜さを取戻した所である。南京や上海の様な焼跡風景も無く、市街は昔の儘であるが大部分表戸を鎖し、有産階級は未だ復歸してゐない。

南京に比べると此町に邦人の進出してをるものが少い。西湖を繞る峯巒には佛寺が點在し、日本の兵隊さんはそれを訪れるものが多い。かういふ佛寺が戦火を受けず完全に保存せられてをるのは有難いことである。清蓮寺の五色の魚や吳山の靈鹿が少々兵隊さんの胃腑のたしになつたとしても大したことではあるまい。殊に意想外であつたのは孤山なる西湖博物館が思つた程荒されなかつたことである。

此博物館は中山公園の隣に設けられ、それ程規模は大きくない。自分等は杭州特務機關の諒解を得、憲兵立會の下に内部參觀を許され、その中の歴史文化部の調査整理となすことを得た。此博物館はその外に自然科学部があり、動植物及び礦物の標本を藏してをり、館長は日本京都大學出身の董聿茂氏であ

り、その方面の標本は可成蒐集せられてゐる様である。鐵製の正門を潛ると突き當りの館は兵器等の模型を列べた現代向きの陳列館である。その左の潛りを這入ると左に鯨の剝製を置いた室、右に植物の腊葉標本及び動物の剝製、中央に五代貫休羅漢圖を刻した石幢を置いた室がある。後の室を突き抜けると滿字と漢字とで並記した文瀾閣の石碑が立つてをる。その左の別館が歴史文化部で這入ると下には畚婦の模型、文廟の祭祀用具、主として樂器類、その他少許の土俗品、古武器の類が列べられてをる。その左右の壁面上には上海戦を表はしたものらしい物凄い排日の油繪が掛けられてゐる。二階は非常な混亂状態にあつたが古代瓦、唐代土偶、古陶器、古銅器破片等があり、大したものなく、貨幣類の蒐藏の様な貴重品は逃去前に館員が持ち去つたものらしい。その外に浙江省を中心とした地志類が少許残つてをる。然し私共に最も興味あつたのは階下の西の小室である浙江古代文化室であつた。番人なる支那人の話によると此室は占領後二階同様荒されてゐたが上海から來た人々により一度片附けられたとのことである。室は三間に四間位の小室で壁面に浙江歴代沿革地圖や浙江各縣歴代人物數比較表などが掲げられてをり、周圍の平い硝子箱に浙江發掘品が列べられをる。之は杭州古蕩の出土石器、杭縣第二區出土土器及び石器、浙江内窰址發掘陶片等に大別される。前者は殘念乍ら杭縣第二區出土石器類と混合しかつ此博物館から出てをる報告書と比較して調べると同報告書寫真番號三の石鑽と稱するもの一つを殘した位で他のものは占領前に持ち去られたらしい。また此附近で購入したらしい例の格子紋、波狀紋、及び

波狀紋及び線狀紋とを併用した三種の完全土器が並べられてあるが之に對して附せられてゐた説明書は次の如くである。

浙江春秋戰國時代之陶器

(蕭山紹興及富陽等地出土)

一、印紋陶器

此土器類を當事者は春秋戰國時代と斷定してをるらしい。してみると石器類にはどんな土器が隨伴してゐたのであらうか。此室の陳列品中重要な蒐集は杭縣第二區出土物であるが一體杭縣第二區良渚鎮一帶の發掘は古蕩に次いで民國二十六年(一九三七)に行はれたもので、此邊に於ける近來での大發見であり、石器類は種々なる形式を數え、殊に南方式のものが多いことが吾々を悦ばせる。土器としては山東の城子崖で發見せられ、爾來學界の注目を惹いてをる黒陶及びそれと同質で黒色を帯びてゐない素陶、少しく赤味が、つた陶器、鼎狀土器の足などが發見せられてをる。此發掘については何天行の報告書が吳越史址研究會から出版されてをる。

此報告書を見ると黒陶の出るのは地表より二米下の青緑又は青黒の淤土層内であり、之に粗製石器が隨伴する。その上の灰白色でまゝ緑色細沙土を雜えた層から玉器及び精巧な石器を出だし、その上に極めて堅硬な積砂層あり、更にその土部が灰褐色の近代耕土層及び墓葬區で此中から印紋と刻文とを併用

した土器片が発見されると云ふ。著者の考へでは出土石器の中一部分は新石器時代に屬し、黒陶の時代は西周以前に遡るべきであり、精製石器に至つては銅器時代の殉葬物では無いかと云ふ議論である。此著者の議論は吾人は檢證して見ない中は贊意を表することは出来ない。此著者は遺跡が住居地であるか墓葬區であるかをはつきり述べてゐない。玉器や精巧なる石器は墓葬區から出ると云ふ議論であるが一體墓葬なるものは地下深く穴を穿つて葬るものであり、墓葬區を發掘して決して新舊の層位を明かにし得るものでない。また石器の粗製精製をもつて一方を石器時代、他方を銅器時代と考ふるのも頗る薄弱な議論である。我國の彌生式時代に於ける如く金屬器が一方で發達し、その爲或遺跡に於ては退化により粗製の石器を出す場合もある。石器の精粗をもつて直ちに時代の新舊を論ずることは不可能であらう。吾人はたゞ黒陶の形式が支那の古銅器に似たる點よりその古代性を類推し、かつ山東城子崖に於ける研究結果を信ずれば之が比較的古代のものであることを信じてよいのではないかと思ふ。従つてその黒陶が石器を隨伴して發見せられたと云ふことは信じてよいと思ふ。また黒陶とあまり質の變らない素陶や赤陶の類もそれに近い時代のもつて見てよいであらう。鼎狀土器の足ももとよりそれに近い時代に屬するであらう。之と印紋土器との關係は頗る困難な問題であるが印紋土器の或物は極めて時代新しく春秋戰國、或ひは今少し後まで此邊に於て用ひられてゐたと見てさしつかひあるまいと思ふ。

此博物館にはなほ新しい時代の遺品として唐宋時代の越窰磁片（余姚上林湖附近出土のもの）、南宋時

代の官窰磁片(杭縣鳳凰山麓出土のもの)、宋代龍泉窰磁片(浙江龍泉出土のもの)が陳列してある。要するに本室の陳列の大部分は佚しないが良渚出土の玉器類の姿が見えず、石鏃の残片が僅か二片しかなく、完型土器の多くが喪失せる點などより見ると此等の陳列品が戦前と同一であつたとは云ひ得ない。然し現在残されたものでも何れも學界の貴重な資料であるから今後とも嚴重に保管せられることを望みたい。

西湖博物館の隣の浙江省立圖書館は支那人が退去前に全部持ち去つたので雜誌類のくだらないものが残つてをるに過ぎず、二階には文瀾閣四庫全書と記した空っぽのケースが幾つも半びらきの儘列んでをり、たゞ板木だけを下階に残して目ばしいもの全部を失つてをるのは残念である。

四、古蕩石虎山遺跡

自分等が杭州に來た最大目的は古蕩の遺跡、支那人の所謂新石器時代の遺址なるものを檢證することであつた。その檢證に就て論ずるに先立ち、先づ支那學者の中支の遺跡に就ての調査を概観して見たい。

最近北支那に於て歐米人、次いで支那人の手により陸續考古學的發見がなされるや、中部支那に於ても支那人の注意は先史時代の研究に向けられて來た。衛聚賢と云ふ學者は民國十九年(一九三〇)南京近傍棲霞山の西北甘家巷の張家庫で六朝墓を發掘し、その際無意識に石器を發掘した。その當時暨南大

學にあつた張鳳之を參觀し、之に對し懷疑的態度をとり、また中央研究院の李濟も來訪してその石器なることを認めたが遺址が一箇所のみでは信するに足らずと云ふ意見であつたと云ふ。かくて、一、張家庫高家山焦尾吧洞、二、甘家巷岡頭上、三、甘家巷土地廟北の三箇所を發掘し、未磨石器六件、半磨石器四件、磨光石器三件、陶鼎殘腿二十四、陶器殘片五十塊、其中幾何學的紋様あるもの十八塊、玩具二件を出土し、之を南京古物保存所に陳列してゐたがまもなく衛氏同陳列所を去り、發掘報告は出版途上第一次上海事變にあつて焼かれ、陳列遺物も此度の事變の爲大部分は失はれ、また他の遺物と混亂して今後の甄別を要する状態にある。

また民國二十四年（一九三五）常州の人士江上梧、陳松茂の二人常州附近奄城に至り、古城址の存在を知り、模様ある土器片多數を拾得した。そこで同年五月十二日張鳳、蔣大沂、郭維屏等に謀り、同地に調査旅行を決行し、その際にも三四十種の花紋ある土器片を拾得してをる。衛聚賢之を聞き、五月二十六日蔣大沂、黃中英、金祖同、陳志良等と共に此處を訪れたが風雨の爲充分調査することあたはず數百片の土器片と疑はしき石三四個を得て歸つた。次いで十月二十六日更に衛聚賢、劉德明、陳志良の三人により第二次踏査が行はれた。此時内城の裏面西部城基の下に文化層を發見したのである。

奄城の遺址は常州城南二十支里の所、常州宜興間バスの途中に存する。遺址は外城（外羅城）、内城（裏羅城）、子城（紫禁城）の三に分れ、黃土をもつて築成し、版築の跡がなく、外城と内城とをめぐつて堀

が構築されてをる。此遺址内に幾何學的模様ある古代土器片が多數散布してをる。土器片の質は紅泥、白泥、紫泥、黄泥、黒泥、灰泥、青泥等であるが、また外紅にして内灰なるもの、外灰にして内紅なるものがある。その外ごく粗末な薄い釉薬を施した土器片少數が発見せられてをる。第二次調査の際沙質紅土で外に縄紋を印した甔片を拾得したが甔片は未だ発見せられない。

遺址内で拾得した石物三四個は打製で著者によると確かに石器としては考へられぬものであると云ふ。完全な土器は村民の處に於て発見せられたが之は高六吋、口徑四吋半、腹周三呎四吋半、底徑五吋半であり、上部に蓆紋を附し、下部に方格紋を印してをる。また拾得した大形土器片の中にも高約二呎にして上部に波浪紋、下部に方格斜形紋あるものが発見せられてをる。磁片も宋元明各時代のものが発見せられる。かういふ遺物は何れも河灘のほとりにあり、もと土層中にあり、風雨の浸蝕を經、河岸の剝落により河邊に露出したものであるらしいと云ふ。

此報告「奄城訪古記」の起草者陳志良の意見では此遺跡出土の印紋土器片は漢代のものであるとのことであるが、その理由は大きく根拠あるものではない。

奄城に續いて発見せられたのは金山衛である。金山衛戚家墩の遺跡は民國二十四年（一九三五）時報の記者黄伯惠、黄仲長の二人が金山衛の鹽田の中で印紋土器片を採集し、奄城を調査した張鳳と同行して之を調査しその土器片の模様と色質とが奄城出土のものと同じきことを発見したに始まる。次いで同

年九月張鳳、衛聚賢、董中英、蔣大沂、金祖同の人々其出土地、戚家墩を去る一支里許海塘の下鹽田の中廣さ約二十餘畝の地點を訪れ、散布してをる土器片を二麻袋採集して持ち歸つた。續いて松江の馬君達なる人また此地を問ひ三麻袋の土器片と一個の完全なる土器とを採集し、之を衛聚賢に研究の爲寄託した。次いで陳志良其地に遊び、海塘中に灰跡あるを發見し、歸りて金祖同に之を告げ金氏は再び衛聚賢等を誘ひ遺跡を調査し、裏海塘の公路斜坡の下に鼎足、鬲片、土器片を多く發見し、その邊數支里に凡り遺跡が分布せることを檢證した。強恕小學の周圍に所在散布するも、また學校を去る二百歩の地點に一土墩あり、地を占める二十呎で高さ一人の脊であるが、最上一呎が黄色浮土層であり、その次の二呎が灰土層で沙礫を含み、中に鐵鎔渣や宋元の磁片及び模様なき土器片を出だし、更に下の二呎が灰黒土で中に鼎足長さ五寸ばかりのもの、鬲片、模様ある土器片を包含してをり、その下が文化なき黑色淤土層なるを發見した。その附近に三の池塘あるもその周圍は同じ様な層次を示してをる。先に土器片を拾ふた海塘も亦同じ様な情形であり、文化層が約百呎も蜿蜒々連り、東にいつて新海塘の石礎となり、西にいつて漸次傾斜し鹽田と平らになつてをる。

遺物はその遺跡の累積せる爲必ずしも一時代に限らぬ。最も多いのは幾何圖案のある土器片である。石器としては張鳳が海濱で拾得したと云ふ長さ一インチ半、幅その半ばに及ばぬ磨製で横に溝ある長方形の石斧と衛聚賢が二回目海塘沙灘の上で拾得した一破片、著者が石庖丁の殘片となすもの、不明瞭

な掲載挿繪によれば寧ろ有柄粗製石斧とでも見るべきものを出してをるに過ぎぬ。鬲片は其質すべて沙泥の混合物であり、火を経て黄褐色をなしてをるがまゝ、金屬質なるものを雜えてをる。模様は繩紋を除く外極めて乏しい。鼎足は長五吋に達するものもあるも小なるは三個あり、一は二吋で白陶質、一は二吋半で紅色沙泥混合質であり、一は長さ三吋で平底、黄沙泥質で石礫を雜えてをる。銅器は張鳳が拾得した一殘塊を除いて未だ發見せられぬ。

土器は馬君達の得た色灰黄で圓底に蓆形紋を附した鍍一個が完全であるだけで他は殘片のみである。その模様は殆んど同一で蓆形紋や格子紋の如き印紋模様である。その外強恕小學の傍で一花園を建てた際地面四尺下に一古井を發見してをる。これは高さ八呎口径二呎三吋、厚さ二吋の陶圈を以て築成したもので圈の内部を方格紋にて、外を繩形紋としてをる。これは恐らく漢代以前のものらしいが、漢瓦も三張、宋元瓷片も數多く採集せられてをる。

以上述べた舉句本報告書「金山衛訪古記」の著者金祖同氏はその出土印紋土器片を吳越時代のものとして認め、金山の地が越の東北隅であり、その遺址は越人のもので西記前三世紀以前のものならんと論じてをる。然しこの年代比定には確實な論據があるとは認められぬ。

奄城、金山衛の發見に次いで紹介せらるべきは浙江省の西北太湖の南湖州附近なる錢山漾の遺跡である。民國二十三年（一九三四）慎微之なる人大旱の爲水乾涸したる錢山漾の湖底から石器時代の遺物を

採集した。同湖は湖州定安門（南門）外十支里の地點にあり、長さ五支里、廣さ一支里半の淺い沼澤である。錢山漾の沿岸は剝蝕を受け、石器をまゝ發見することが出来るが、湖底には最も多く散布してをり、その分布區域は二哩の廣さに及んでをる。遺物中最も多いのは土製鼎足で、それに次いで石鑿、石鏃、石斧であり、石刀は最も少い。發見者は三百餘個の石器を拾得し、之を左の十七種に區別してをる。

- 一、石大刀、二、石小刀、三、石斧、四、石鏃、五、石鑿、六、石鎌刀、七、刮皮刀、八、石鑿、九、石鑽、十、石矛、十一、石鏃、十二、石標槍、十三、石刺刀、十四、石厨刀、十五、石戈、十六、石鉞、十七、石鎚、その外土器片數百個を得たと云ふ。然し著者の記述は甚だ簡單であつて遺物の眞個の性質は實見せざる限り何とも斷定し難い。

かういふ諸遺跡に關する知見を前提として杭州古蕩に於ける古代遺跡が人々の注意を惹いたのは民國二十五年（一九三六）五月のことである。それより先三月衛聚賢が事あつて南京に赴き、中央研究院を訪れ、何遂なる人が杭州の骨董屋に於て購入した石鏃三個を見た。その出土地に於ては骨董屋の言が信用せられず、此石鏃は北方出土のものではないかと疑はれてゐたが越えて五月二十四日衛は吳越史地研究會の事により杭州に赴き、骨董屋に於て兩個の石鏃と一個の石鏃とを發見した。彼は之を購ふと共にその出土地を究め、西湖の北老和山の下古蕩附近に構築中の第一公墓の地より出でしことを確め得た。そこで彼は周泳先と共に同地に至り工人にかくの如き石器の有無を尋ねた所、その南方の土を掘る際、

其種のもの多く出土したが無用であるから皆埋めてしまひ、現在西方で土を掘ってをるが其處からは出るものが比較的少い。必要ならば掘り出してあげんとの事で早速完全な石鏟二、殘片一、石鏟一を掘り出して來た。衛は金錢を與へて之に謝したので工人達は争ふて工事を放擲し、土中に之を求め出したので土工頭が激昂した。そこで一工人は衛氏等に土工頭に知れぬ様門外に携へ行くから暫く待つてくれと云ひ、一行は四週の地層を観察し、また地面上の破片を拾ひ、公墓外に出た。すると後から工人が一箕の中に石器の完全なるもの、不完のもの、約三十餘個を携へ來つたので一行は悦んで之を購得した。

衛氏は以上の經過を上海の時事新報に發表すると共に五月二十一日杭州を再び訪ひ、金祖同、周泳先及び浙江省立西湖博物館々長董聿茂、同じく同博物館歴史文化部主任胡行之などと共に同地點の發掘を行ひ、十二人の工人を雇ひ、公墓内に三坑を掘り、次いで公墓外南面に一坑を試掘し、石器六個、陶片三個を得た。

今その經過を胡行之の記文により記すと、發掘前日まづ胡、周、金の三人が地址を考査し、石鏟、石斧等六個を採集したが、發掘當日五月三十一日には午前七時古蕩に至り、公墓内の右後方、老和山の南北長さ三米幅一米の一坑を工人三人を雇つて試掘した。然し表面の地層は既に幾度も掘り返してをつた地點なので深さ尺餘で原生土壤となり、紅色粘土と白色砂粒とを出だし、得る所ないので發掘を中止した。

またその旁に古墓穴あるを見、再び前と同じ大いさに土工三人を雇ふて之を掘らしめたが此處は舊時の墓道であつたらしく、掘り始めると直ちに多くの漢瓦の破片が表はれ、まゝ陶片を得るのみで石器を得ることが出来なかつた。そこで再び南行し、第三坑を發掘したが今度は地層が前とことなり、文化層の黒褐色土であり、上層よりは精巧な陶器片が出、下層よりは奄城金山出土のものと同様の土器片、また一個の完全な石鏟を發見した。之が實地に掘獲した初めての石器である。またその旁でも隨時發掘して石器殘片三個を獲得してをる。後更に掘つて深さ一米餘に至り、原生土壤を發見して發掘を中止した。

午になり衛氏は杭州青年會で講演する豫定の爲杭州に歸り、金祖同、樂嗣炳また相共に去つたので後に残つた西湖博物館の連中だけで發掘を繼續した。公墓内は既に幾度も掘り返して平地となつてをるので昔時の面影はないが、公墓の外は荒涼たる丘陵の儘であり、古墳累々としてその土層の上には灌木叢草が生茂り、公墓の地表と比すれば約三米餘高くなつてをる。その一地點を選び試掘して見ると掘ること一尺で即ち空穴墓道であり、泥灰砌をもつて圓頂棺槨を構成してをる。掘ること數小時で發見ほど同様であり、石器二個を獲得したが此地は近代人の墳墓多く盡くその棺槨を遷した後で無ければ發掘出来ないで即ち調査を中止した。

即ち此發掘は午前九時より午後五時に至り僅か一日で得る所の石器は僅か六個であつたが前日得たる

所と合計すれば十二個である(原文十六個とす)。之にあはせ得たる土器片三個を勘定にいれ、ば相當の成績と云はねばならぬ。以上が發掘當事者胡君の記する試掘經過である。

報告書の中にはかくして得た遺物の外に類似遺品を含め、寫眞を示してをる。之によると試掘の際出土したものは同書の名稱に従ひ舉ぐれば石鏃二、同殘片一、石鑽一、石鑿一、石鎌殘片一であり、その外古蕩出土のものは石鏃一、同殘片二、石鉞一、石戈二、石鏃七、石紡錘車殘片一、石刀一、石鏃空心圓石一である。その外杭縣第二區出土のものとして石鎌一、石刀一、石鏃一が舉げられてをる。陶器中古蕩試掘のものとしては土器片三片、及び紹興出土で西湖博物館所藏の陶罐一、同じく陳萬里所藏の陶甍五、吳越史地研究會所藏の金山衛戚家墩出土の陶尊一、紹興出土の陶罐二、松江出土の陶甍一、樂嗣炳藏紹興出土の陶罐一、西湖博物館藏の杭縣第二區、杭州岳飛廟附近出土の漢代陶瓶二を比較對照の爲に掲げてある。

此發掘は試掘であり、もとより之によつて多くを望むことを得ないが兎に角從來全く石器の存在が報告されてゐなかつた地點に於ける最初の發見記録であり、その上、中には學界の大問題となつてをる南方系石斧の類もみられ、種々の點から重要な報告であつたので予は早速此報告と金山衛訪古記との簡單な紹介を昭和十一年(一九三六)十二月の東京人類學會出版の「人類學雜誌」第五十一卷十二號に發表して置いた。ごく粗雑な紹介であつたが吳越史地研究會では民國二十六年(一九三七)七月上海で出版

した「吳越文化論叢」の中に拙稿の漢譯を轉載してをる。

同年夏北支で起つた日支の衝突は遂に中支に擴大し、是等の遺物の出た一帯の地域は我軍の占領する所となつた。此一篇の試掘報告を讀んで吾人には多くの解せない諸點があるが之を實際檢證したいといふのが吾人の念願であつた。殊に吳越史地研究會の連中が研究續行出来ない間その地點を一時管理した日本人として之を研究せずに放置せずに置くこととは出来ぬ。戰時中であつて萬事不便ではあつたが陸軍省當局の許可を受け、昭和十三年五、六月にかけ中支遺跡地を實地檢證することゝなつたのである。

此古蕩の發掘報告を讀んで吾人の甚だ物足らなく感ずることは遺物の出土状態に就て充分の層位的關係が示されてゐないことである。殊に衛聚賢氏の發掘したのは第一公墓内地均し工事で地表の攪亂せられし地點であり、かゝる地點の發掘では何等學問的結論が得られないと思ふ。

此衛聚賢の研究及び學說に就ては支那學者の間でも異論あり、例へば胡行之は「吳越文化論叢」の中に集録された「浙江果有新石器時代文化乎」と云ふ一文の中に次の如く述べてをる。石器はたゞに實用のみならず、また貢獻品として人に贈り、また之を殉葬に用ひたるものである。古蕩出土石器の中最も多きものは有孔石斧で之は鐵器を用ひて穴を明けしものなるのみならず、また美麗にして光澤あり、儀飾的のものである。古蕩及び良渚鎮附近出土の石器の一部分は新石器時代のものに似てをるが然し江南

一帯は石器時代當時人類の居住に適せざりし如く、新石器時代のものに似た石器も要するに金石併用期の使用物で一種の殉葬品として用ひられたものであらうとする。更に劉之遠も「石器的形成與地層之探討」なる一文に於て古蕩出土の石斧とその穴を明けし際の殘片と思はれる圓心とは到底石をもつては生成出来ないものであることを述べ、次に其石器が石英岩類に似たもので鐵器か銅器かを使用せざれば穴を明け得られないこと、第三にその出土石器の多數が表面光澤あり、刃が銳利で使用の跡なき所からその殉葬に用ひしことが想像せられること、また第四に坑を掘鑿すると深さ尺餘で原生土壤に達し、之は紅色粘土と白色沙粘土のまじつたもので得る所なく、また旁で古墓穴を掘つたが埴頭碎瓦多くまゝ、陶片を得るが石器を見つけ得なかつた。更に南にゆき第三坑を掘つたが、此處は文化層の黒褐色土で上層からは精美な瓷片を下層からは奄城や金山出土と同様な陶片そして石器一片を得た。之が今度の發掘の實地收獲である。所がこの三坑皆同一の地平にあり、その一は原生土壤であり、論議の外なるも他の二坑は皆舊墓道である。第三坑中の黒褐色土は有機物の炭質的存在なく人民の生活した住所を示すこと出來ず、かつ石器と陶片の所在する地點は明かな境界線なく、これはたゞ舊墓道だといふ解釋がなされるのである。第五に古蕩の石器の出る地點は古代に於て海邊に當つてをる。杭州以東の平原未だ成立せざる時かゝる離洲に高度の文化を發生し得るかは疑問である。第六にその後陸地上昇し大森林が發生した時に於ても今のアフリカの如き環境であつたと考へられ、かくの如き熱帶氣候の地に優れた文化が發生し

たとは考へられぬ。かういふ諸點から古蕩發掘の石器は殉葬物と認むべく之をもつて浙江の古文化が悠遠であると云ふことは出來ぬ。之を金石併用期の文化遺産とすることは納得出來るが新石器時代の石器となすことは出來ぬと云ふ論據である。

之に對し衛聚賢は「浙江石器年代的討論」といふ文によつて之を駁して云ふ。石器を殉葬する例は石器時代より存してをる。石器の中刃を用ひないのは新石器末期のものならんも刃を使用した石器は新石器中期のものである。古蕩の石器には成程新石器時代末期のものもあるが然し使用に供したのもあり、新石器時代のものを見て差支へない。吳越の歴史から見ても此附近は周末に於て銅器がよく用ひられてをり、従つて精巧な石器を殉葬に用ひた新石器時代末期は周の中葉に遡るのではなからうか。また新石器時代の人類が海濱に居住すること能はずと云ふが歐洲、日本に於ける反對あり、また海中の離洲に文化が育成しないと云ふが新石器時代人の舟楫を利して海島に渡ること臺灣の如き例があると論じて衛氏はその所論をひるがへさない。

今この兩派の説を檢討するに兩者共に誤まれる感がある。たゞし發掘の不完全から新石器時代の遺址たるの徵證なしとする前者の主張には傾聽すべき點が多い。

一體かういふ遺物を出だした古蕩と云ふ地の地形地質は如何なる状態にあるのであらうか。

古蕩附近の地質に就ては劉清香の「古蕩附近地質」と云ふ一文が「杭州古蕩新石器時代遺址之試探報

告」中に掲げられてをる。之によると此附近の最古層は下石炭紀より泥盆紀に至る千里岡砂岩（一に老和山層）で之が桃源嶺の山脊を構成し、其次は白堊紀の流紋岩で青石橋の東南附近の嶺を形成し、この岩層の表面は風化して紅白色相まじはる泥土を生んでをる。其次が第四紀の沖積層で、桃源嶺及び其附近の嶺の下に分布し、流紋岩の上を覆つてをり、黄褐色を呈し、黄色砂粒、黑色有機物質、黄土、塊状礫岩等をまゝ含んでをる。その層次が比較的よく現はれてをるのは古蕩の東、衍慶寺の山脚下、蔣王寺を去る三十米の地點の餘杭バス道の掘鑿した崖で此處には明かに風化流紋岩上に厚さ約半尺の砂礫層が覆ひ、多く千里岡砂岩よりなつてをる。その上に厚さ約一米餘の黄褐土があり、その中に厚さ約二三寸の黑色土一層を含んでをる。この堆積層の頂部は現在の河床の高さと比ぶると二三米の高に達してをる。現在の河床は此堆積層が成立した後海岸がまた下降し、河水が再び侵蝕を行ふたものであると云ふのが劉氏の意見の大意である。

一體杭州附近の地質に就ては従來若干の研究が西湖を中心として發表せられてをる。石井八萬次郎理學士の「清國浙江省杭州府附近地質調査概報」（地質學雜誌一六卷一八五號）には西湖が「古紀岩層より成れる山地の測面若くは溪谷の一方火山岩の爲めに閉塞せられて成生せられたる湖水なるべし」と主張したるに對し、竺可楨はこれを一個のラグーン（潟湖）なりとし、古代に於て西湖は海洋の一部、錢塘江口の小灣であり、錢塘江の沖積土により灣口が閉塞され、ラグーンとなつたものであらうと推定して

をる。然し錢塘江の沖積土だけが西湖を成立せしめた譯でなく錢塘江の有名なる潮流が東より西に海濱の泥沙をおしあげ、また溪谷より下つて東走する水も之が爲堰き止められ長堤を作つたものであらう、また海準が次第に低下し、堤防を破壊せず、湖命を保つたことも湖生成の副因であらうと論じてをる。

要するに湖水に沿ふ一帶の地域に於て海準が變遷したことは疑ひない。竺氏はその理由を左の如く論じてをる。葛嶺一帶の流紋岩の海に面する一側はその間隙が紅土をもつて充填してをり、山頂にまで達してをる。然し内側はさうでない。また湖の西南南高峯に近き處に石灰岩の小峯が林立してをるが、その每峯、腰の處に一道の平行した水線があり、之は當時の水痕である云々。

要するに杭州附近の海水が低下した時露出した平原が今日の沖積平野を形成してをる譯である。廣い渺茫たる平原の中に半山の如く孤立した圓頂の小山を見る光景は全く異色ある風景を構成してをる。遺跡地たる石虎山の村落の後に連る老和山の山嶺は曾つては西湖の北岸なる寶石山、葛嶺など、共に海中に突出し入江をおし包んだ岬角であつたらう。次第に海が退却するにつれ今日の石虎山村落の附近は格好の居住地を供給したと考へられる。胡行之が江南一帶の地が石器時代に於て人類の居住に適しなかつたと云ふのは云ひ過ぎである。此邊の沖積土は紅色粘土からなつてをる。恐らく老和山などを形成する千里岡砂岩が風化して作つたものであらう。最深部は石英の礫を多く含み、之は千里岡砂岩が一部白色石英岩、石英質礫岩から成立してをるのと對應するものであらう。

老和山の山嶺が陵夷して一帯の山麓丘陵臺地を形成し、それが冲積平原の水田地帯と相接してをる。其處に昔から支那人が墓地を作つたと見え、新舊の古墳が纍々としてその上に灌木雜草が生ひ茂つてをる。かういふ地勢の所を選び、南北約三百歩、東西約七百歩の共同墓地即ち第一公墓を最近切り開いたのである。丘陵臺地は約三米位の高さで切り開かれ、地ならしして廣い平地が出来上つた。此工事の際多くの遺物が發見され、支那考古學者の注意を促したのである。

かゝる荒蕪地は今日共同墓地の南に僅かに残つてをるのみであり、墓地の西の方は山に續く臺地で石虎山の村落家屋が點々とし茶などの耕地が擴つてをる。第一公墓は出来てまだまもないので僅か一部分が利用されてをるだけであり、表面にはまだ印紋土器、宋磁の破片が點々散布してをる。然し共同墓地内は地層が著しく攪拌され、到底之を發掘しても調査の目的を達することは不可能である。そこで自分は共同墓地の南沿ひの丘陵に試掘地點を選ぶことゝなつた。

遺跡地に行くには二路ある。一は杭州丘飛廟の前を西に進み、玉泉寺道を右折し仁壽山の丘陵を越え青石橋の部落に出で、玉泉山には曲らずにまつすぐ北行する道であり、他は杭州の市街の西端から保俶塔の前を北行し、日本總領事館の前を過ぎ更に左折し、余杭バス路を西に進み古蕩の手前にある蠶絲學校の所を左折する道である。前の路が新道で雨降りの日など泥濘甚しいのに反し、後の路はトラックに適し自分等は主として之によつた。杭州の町はづれから蠶絲學校に至るまでの道は草の一面生ひ茂つた

平蕪で、大日本陸軍用地の大きな棒杭が立ち練兵場として使用されてをる。道に沿ふて左に北支那戦争で倒れた佛人兵士の記念碑や中國革命戰士の廟が、寶雲山の連峯を後にして立ち、右に湖成平原の様に廣々した平野を越えて標高二四五米の半山が島の如く浮んでをる美しい風景である。老和山の麓なる蠶絲學校は戦争で焼かれ今作業部隊がバラックの建造中であつた。之を警衛すべき〇〇部隊の一個分隊が駐屯してをる。

此學校の手前の路を左折すると右に宏壯な杭州第一公墓の門を見る。左は水田であるが公墓に沿ひその南と北側は灌木叢草の茂つた一帯の丘陵であり、その後は老和山の山陵に續いてをる。門の中に入ると中央に禮堂が見える。公墓の周圍には黒く塗つた竹の矢來が廻らしてあるが、その一箇所壞れた地點から南の丘陵に出で、矢來に沿ふて東西に走る里道の傍に格好の地點を選んで試掘をなすことゝなつた。六日十一日午後一時、吾々は西湖々畔で三名の人夫を雇ひ、服部中尉の嚮導で墓地に至り試掘の地點を選んだのである。然しその翌日から霖雨に惱され、一週間は全く天を仰いで長歎せざるを得なかつた。十八日に至り初めて雨が止んだので勇躍して愈々發掘に取りかゝつた。大體丘陵の上に公墓の柵に向つて直角に南北約十米のトレンチを掘つてゆくことが吾々の仕事であつた。十八日にはそのトレンチの北、公墓に近き邊より磚片を掘り出だし、また時代新しき完全な骨壺らしい陶器を出だし、南部に於ては開元通寶及び釘、宋磁片などを出土した。

十九日には南邊より地表一米半から二米の所に古代土器片を出だした。之は格子紋ある堅硬なもの、羽狀紋ある赤色土器薄片及び同様式の灰色土器片の諸種類あり、從來かゝる土器片の適確なる出土状態の報告が無かつただけ吾々には興味深かつた。殊に愉快であつたのは北邊より塼壁があらはれ、その内部床上に壁に接して完全な釉薬を施せる瓦瓶が出土して來たことである。また塼墓内の中央部に近き所より鐵釘及び琥珀製の耳璫が見出だされ、吾々の發掘は江南に於て塼室墓を發見すると云ふ正に豫期せざる成功を收め得たのである。また塼壁の東北端の上部に十八日に發掘したと同様の新しい壺二個を發見した。之は塼墓の存在を知らず後人が埋めた新しい骨壺であらう。

二十日は小雨が來りいさゝか出が鈍つたがそれ程烈しくならなかつたので發掘を繼續した。トレンチの南部に於ては地表下二米八〇にて水準に達し水が出て來て困つたが、それでもなほ時々土器の細片が出るので依然掘り下げていつた。支那の文化層の深いのに吾々は驚かされる。北の塼墓の方では前日同様の瓦瓶、及び褐釉の小瓦壺及び玉碎片を採集した。

二十一日には霧雨を冒しなほ發掘を續行する。塼墓の内部より薄き釉薬を施した四耳ある瓦壺を出だし、また朱の附着した乾漆片らしきもの、鐵釘などを發見した。此塼室の東北端及び西側は破壊せられた可成擾亂せられたらしいが、幸ひ底面が割合に完全に保存せられたことは不幸中の幸である。トレンチの南部に於ては三米三四糎まで掘り下げたが二米九〇糎邊より赤く堅剛な礫質土層あり、自然層にて一

の土器片も出ださず水が湧き出るため發掘を中止した。

此日西岡君は公墓内の表面採集をなし石器二個、古代土器片三個を採集した。その一は片刃の有段石斧であり(第三圖版1)、他は薄い粘板岩の四角斧である(同2)。之は杭州の骨董屋で集めた古蕩出土と云はれる有孔石斧二個と共に、古蕩附近が兎に角石器を出だす遺跡であることを證するものであらう。然し吾々の發掘が一も石器を出ださず、古蕩が果して如何なる種類の遺跡なりしやを確かめる爲にはなほ將來の研究を要するものである。然しながら最初の試験的發掘として從來の試掘報告の不足を補ふ新資料を幾多知り得たのは悦ばしい結果である。

土 器

出土土器片をほゞ三類に分つことが出来る。

第一類、極めて硬質で製作進歩せるもの、比較的上層に出土す。

第二類、比較的硬質で印紋及び刻紋あるもの、比較的下層に出土す。

第三類、硬度極めて低く、その中赤色のものは印紋あり、灰色のものは無地である。前者と同じく比較的下層に出土す。

以上の中第二類と第三類は時代古く、第一類は年代新しきものと考へられる。

第二類

印紋及び刻紋土器は奄城及び金山衛に發見せられるものと同じく南方の特色として喧傳せられてをるものである。本試掘によつて得たるものを敘述してみると1aは大型の甕の縁の破片らしく口縁近くに並行斜線を粗く交錯した模様を附し下部に粗大な網狀紋を印刻してをる(八・一糶×九・五糶、厚一〇・五糶)(第三圖版7)。16は發掘地點は異なるが1の同部分であつて同じく上部は並行斜線交錯紋様で下部は網狀印紋である(四・七糶×五・二糶、厚〇・七糶)。13 4 9は同じく網狀紋である(13幅八糶、厚〇・六糶、4幅六・七糶、厚六―七糶、9幅五糶、厚〇・六―〇・七糶)。色は1、16は赤色、13は灰褐色、4、9は灰色で胎質も同様である。1bは網紋と細い並行線條との重複した錯雜紋様で色は灰色である(幅六・五糶、厚〇・五糶)。10は羽狀紋で一部に網紋を印出し、色は赤色である(三片よりなり、一は幅八・六糶、二は五糶、三は二・七糶、厚〇・六―〇・五糶)。

5aは以上と違つて並行線條の印刻模様で灰色である。5bは同じく並行線條印紋に細かな布目に似た線を交錯させてをる(5a二・六糶×一・六糶、厚〇・五糶、5b四・一糶×二・三糶、厚〇・三糶)。共に質は固い。15はごく粗雜な並行線條の交錯紋で1aの上端模様に似てをる。灰色で質は固い(四・七糶×二・七糶、厚〇・七糶)。

第三類

之には印紋あるものには7の如く細い並行線條をごく自由に水紋的に刻したものがあつた。胎質は赤―

灰―赤で、硬度は割に低い(二片より成り、大きさは幅五・三糎、他は五糎、厚さ共に〇・五糎)(第三圖版5)。
10 bは並行線條交錯模様で赤色質柔軟である(二・八糎×一・八糎、厚〇・三糎)。3も線條交錯紋らしいが非常に柔く表面は剝落してをる。胎質は赤―灰―赤である(三・六糎×三・五糎、厚〇・五糎)。14も同様な胎質も表面同様赤色である(四・二糎×三・三糎、厚〇・三糎)。6は表面は殆ど剝落してをる。胎質は赤―黒―赤である(九糎×五・五糎、厚〇・三―〇・四糎)。

以上は赤色であるが次のものは灰色である。八は壺の頸部の斷片で硬度は低い(高三・八糎、幅七・八糎、厚〇・三糎)。20も同様である(高二・七糎、幅七糎)。17と2とは何れも小破片で灰色を呈し、硬度低きものである。

第一類

11は表面に剝落した黄色の釉薬の跡あり、灰褐色を呈し、胎質灰色、裏面に轆轤の跡がある。此土器片は墳墓内に於て發見せられた土器と同質である。同墓の時代を漢末六朝初期とすればほゞその時代に推定なし得る土器片である(七糎×十糎、厚〇・六―〇・五糎)。12も之と似てをるが、表面に赤色塗料の跡が存し、地は黒味勝の褐色である(七糎×八・七糎、厚一―〇・八糎)。19は甕の縁の斷片で灰色で紋様なく硬度は硬い(六・二糎×九・六糎、厚〇・七―〇・六糎)。

第一公墓内の表面採集によつて得た土器片の中出土土器片に該當するものは矢羽狀の印紋あるもの、

網狀印紋あるものの二で、色は赤色又は灰色であり、質は稍硬い。表面採集によつてのみ得發掘により得られなかつた土器片に重方格紋(第三圖版6)と水平と斜めの並行線條を交互に配列した印紋のもの(第三圖版3)がある。その質は硬く、胎質の或者は紫色を呈してをる。この土器片は金山衛にも奄城にも極めて分布多きものである。古蕩採集のものは製作好妙で比較的後代のものではないかと考へられる。金山衛の報告書中の土器片11 32 31 41、奄城報告書中の土器片 28 31 32 33 34 35 36 は之と該當する。此種のもの分布は南方に於てかなり廣い。香港船遼洲の出土物にも存することはフィン氏の報告一・二の圖版中に見ゆる(D. J. Finn, Archaeological Finds on Lamna Island near Hong Kong, Part 1. II, The Hong Kong Naturalist, Vol. III, Nos. 3, 4, Vol. IV, No. 1, 1932, 1933)。印度支那清化東山^{トアン}の遺跡から出る土器も之に似た方格紋が印刻されてをる。

北方に於ては極めて稀れではあるが殷墟に於ても發見され、また安徽省の壽縣からも見出される。然し北方支那の先史、原史時代の土器の主流とは明かに異なるものである。

此遺跡出土々器中從來の報告に注意せられなかつたものに灰色又は赤色の薄き脆弱な土器片がある。

之は西湖博物館の蒐集の中にも見え、良渚鎮より出土するものと認められる。その形式は臺附皿、耳附皿、壺の類であり、此種の土器の一個を予は杭州市中内の骨董屋に於ても購ふを得た。それは完形ではないが灰色の臺附皿の大きな破片であり、極めて粗製のものである(幅一九糎、高六・二糎、厚〇・二糎)。

西湖博物館には此種の土器で赤色のものもあつたが予は之を市中に於て購ひ得なかつた。然し之と伴ふて聯想せられることは良渚鎮に於て出土する黒陶の或物は此類の土器と似かよふ事實である。黒陶には精巧のものと粗製のものとあるが後者は表面の黒色が剝落せるものあり、全く灰色土器の觀を呈するものあることである。また硬度も精巧なものは極めて硬いが粗製のものは甚だ脆弱である。自分の推察が許されるならば古蕩出土灰色土器片は黒陶隨件する灰色土器の一群に關係を持ち、その一類に屬するものではなからうか。印紋土器の方はその細工に於て比較的精巧なものであり、その或物は後代のものと考へられるがこの灰色土器の方はその粗製脆弱の點より見ると年代的に少し溯りうるのでは無からうかと考へられる。かういふ想定をなすのに役立つのは良渚鎮遺跡の出土状態である。これは支那學者の調査した所で檢證しない限り信用出來ないが、兎に角黒陶は下層に印紋及び刻紋土器片は表層に出土すると云ふことを述べてをる。自分の想定する如く灰色土器片が果して黒陶に隨件して存在したものとすれば印紋及び刻紋土器より一時代前に榮えた土器類と考へることが出来る。然し自分の發掘による經驗では灰色土器片と印紋土器片とは混合して發見せられるので時代の先後は今の所自分としては確實に斷言することは出來ない。たゞかくあるべしと推定するだけで今後の精査によつてなほ闡明せられることであらう。

發掘により完型の土器は一つも出土し得なかつたが杭州市中の骨董屋に於ては「古蕩物^{クワン}」と稱して此

近傍出土の完型土器を賣つてをるので吾人は之を若干購入することが出来た。また同種のもものは西湖博物館に藏せられてをり、「古蕩新石器時代試探報告」中にも若干が圖示せられてをり、上海の骨董屋に於ても見ることを得た。杭州購入品の中最も古式と考へられるものAは口縁に波狀紋あり、下部に網狀紋ある土器壺である。之は褐色を呈し、土質は、砂礫を交え、極めて粗製であるが、硬質である（口徑一〇・五糎、底徑九糎、高十一・五糎）。之に次ぐものBは前者に比べて背稍高く、赤味を帯び前者より細き網狀を印刻し、口縁外部にもごく薄い布目紋を押ししてをる。硬度は劣らず硬い（口徑一一・七糎、底徑一二糎、高一二・五糎）。Cはより小さく細い網紋を印刻しかつ縁を擦り切つて滑かにしてをる。色は鼠色で硬度は極めて高く、前二者より遙かに精巧である。

色彩は前者Aが灰褐色を、中者Bは赤色を、後者Cは鼠色を呈してをる。之と稍異なるは大形で櫛目を縦に間を隔て印刻せるもの、及び斜條方格紋により印刻し上に連續圓形模様を刻するものである。前者Dは上部に蓋ありしなるべく口縁が平たくなり、後者Eは普通の開き口をなしてをる。色は共に灰色であるが前者は土のため黄色を帯びてをり、後者は極めて氣泡が多い。此二者は年代は稍下るものであらう。

Aは口徑 十・五糎 底徑 九糎 高 十一・五糎

B 十一・七糎 十二糎 十二・五糎

C	七・三糎	底	六・五糎	七・四糎
D	十八(内) — 廿三・五(外) 糎			
		十四・五糎	高	廿八糎
E	十九・二糎	十五糎	高	廿七・七糎

石 器

今回の試掘には石器を發見することは出来なかつたが然し地上採集によつて得た二個の中一つは片刃で背面に段あり、所謂有段石斧と言ふべきものであり、中支に於て發見例多きものである。「杭州古蕩新石器時代遺址之試探報告」中にはその例が擧げられてゐないが、何天行の「杭縣良渚鎮之石器與黑蕩」第四圖版中に大形で極めて形式優美なる磨製の有段石斧A(直長四吋、中寬二吋二分、胡長一吋、刃長二吋三分、中厚五分、胡厚三分)、中形の有段石斧B(直長二吋五分、中寬一吋二分、胡長一吋一分、中厚五分、胡長四分)、狹長なる有段石斧二個C・D(Cは直長三吋五分、中寬六分、胡長一吋六分、中厚五分、胡厚三分、Dは直長三吋八分、中寬八分、胡長九分、中厚五分、胡厚四分)を圖示してをる。衛聚賢はAを「吳越文化論叢」一五九頁にCを同一一六〇頁に古蕩出土として圖示してをるのは間違ひである。今日杭州西湖博物館藏する石器中に此の式のもの七個ある。

(昭和十三年六月調査)

(單位は糎)

- A 全長 一四・一 段長 三・五 幅刃 九・二 上端 八・一 段部 八・七 厚段 〇・五 中央一
- B 全長 八・二 段長 四 幅中部 四・五 厚中部 二・七 段部 二
- C 全長 八・二 段長 三・八 幅中部 四・三 厚中部 二・五 段部 二・一
- D 全長 一〇 段長 四・三 幅 七・三 厚中部 一・六 段部 一・四
(段部の境目に小溝あり、下端斷折す)
- E 全長 七・八 段長 二・三 幅 一・三 厚中部 二・八 段部 二・三
- F 全長 八・一 段長 二・四 幅 一・二 厚中部 二・七 段部 二・二
- G 全長 一一・五 段長 五・五 幅 三・五 厚中部 四・一 段部 三
- H 全長 一七 段長 六 幅 四・八 厚中部 二・八 段部 二・七

なほその外に此の系統に屬するもので長大にして中ぞりのもの一個が存する。

有段石斧が中支に於て普通の出土遺物であることに就ては異論ないと思ふ。今古蕩の公墓内に於て採集したものは頁岩より成り甚だ摩損してをるが明かに使用された形跡あるものである(第三圖版1)。

- 全長 九糎 段長 三・六 幅 四・五 厚中部 二・二 段部 一・八

有段石斧の支那の他地方に於けるものとしては南支香港船遼洲の出土例が知られてをる。圖に示したものは長七・三吋である。その外長大にして有段なる石器二個が同じくフィン氏により報告せられてをる

(Finn, Archaeological Finds on Lamna Island near Hong Kong, Part III, Fig. 1, Plate 19, The Hong

Kong Naturalist, vol. IV, No. 2, 1933)。

此の形式の石斧は臺灣に於ても普通である（林惠祥、臺灣蕃族之原始文化、國立中央研究院社會科學研究所專刊第三號、一九三〇、七八圖版）。

宮本延人氏は「ドルメン」日本石器時代特輯の中に臺灣の石器に就て述べ有段石斧に叙及し、「その中最特徴あるものは臺北平野のもので、石器の中程の所を磨つて縊れを作つてゐる。大なるものは長さ二十糎位、小なるものは長さ二糎、幅一糎位のものもあり、その縊れの部分の磨り減らし程度で色々な形状となつてゐる。恐らくは柄に緊縛した節に紐の動かぬための便にしたものと思惟される。石の質は主にスレートで砂岩のものも相當にある。この形は臺北市附近一帯に見出されるもので貝塚の中にも見られる」と述べてをる（ドルメン第四卷六號一六二頁）。文中には縊れと言つてをるが圖示せられたものは明かに有段石斧である。

インドネシアのその他の地方に於ける此の石斧の發見例は A. B. Meyer und O. Richter, Steinzeit in Celebes, 1902/3 より引抜かれた例が Heine-Geldern, Ein Beitrage zur Chronologie des Neolithikums in Südostasien (Publication d'Hommage offerte au P. W. Schmidt, Wien, 1928) 及び Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier (Anthropus XXVII, Wien, 1932) 中に轉載されてをる。之は北ヤンズよりの發見である。

之に對し更に Ivor H. N. Evans 氏が Man, XXX, P. 123 に發表した An Unusual Type of Stone Implement from British North Borneo 中に更に北ボルネオよりの出土例を傳へてをる。

フィリッピンよりも此の有段石斧が發見せられてをるとのことである、

此の形式の殊に多いのはポリネシアであり、Newsealand, Chatham, Cook, Tubuai, Society, Tuamotu, Marquesas, Hawaii に發見せられる。又此の石斧が屢々屈曲して中ぞりの丁度西湖博物館所藏H形に類似したもののがポリネシアに多い。

此の有段石斧に類似せるものは我國では常陸國より發見せられてをる。殊に興味あるものは此の石斧が同じく南方系なる有肩石斧と相伴ふて發見せられてをることである。

東京人類學會雜誌一五七、二八〇頁、野中完一筆、「瓶廼舍雜記」中に次の如く言ふ。

◎異形石器二個、一昨年九月私は下總より常陸に掛石世期の遺跡調査として旅行致しました、同月廿三日江戸崎にて東吾宇平氏の紹介を以て同じ町の山本喜平氏方に參り所藏の古物を一覽致しました。數ある中にも(甲圖)(一)(二)に示す石器二個は異形の品と認めました。(一)は先年佐藤傳藏氏が陸奥龜ヶ岡より發見せられし石器に似て居りますが、上端に穴のないものと兩側にも刃の付てるのが違ひます。(二)は殆んど片刃の如き磨製石斧にして、一面の方に段のあるは臺灣の磨製石斧に似て居ります。出所は一
二共常陸國信郡信太村との由。

然し我國に於ては此の有段石斧は極めて稀れであり、寧ろその異體と見られる有溝石斧が彌生式文化と併行して發見せられてをる。

有段石斧と同一類に考へられてをる有溝石斧は我國に古來抉入石斧と稱せられてをるものであり、之に就ては古來我國學者によつて種々説がある。初めラウフェル氏がその著 *Jade* 中に支那山東省出土と傳ふる *grooved axe* を印度、日本、アメリカのものと比較し、殊にチュクチュの間に現用される石槌とに比べたるより (Laufer, *Jade*, P. 50—53, Chicago, 1912) 始まり、濱田博士が抉入石斧を之と同じ系統に入るものなるべしと説かれ、榊原政職氏が更に其の説を敷衍せられて北太平洋文化説を主張せられたとのことである(梅原末治氏、鳥取縣下に於ける有史以前の遺蹟、大正十一年)。梅原氏は此の説に疑ひをさしはさみ、抉入石斧と *grooved axe* とを「同一視するには其間に若干の距離あるが如し」、と論じ、抉入石斧の「分布が特に關西と南朝鮮とに濃厚にして滿洲朝鮮等に密接なる關係のある彌生式土器と伴出するの事實に至りては、假令北太平洋文化の存在を肯定するとせむもより局部的の特徴と解するの妥當なるべきを思考す。實に北太平洋文化説は著者自ら言へる如く一の興味ある假説なり、然れどもこれが學界の承認を経るにはなほ君の熱心なる調査研究に待たざるを得ず、抉入石斧に就ても今はそれが南洋との密接なる關係を肯定し得るに満足するの外なきなり」と論せられてをる。なるほど *grooved axe* と抉入石斧とを同類と見るのはその用法より見ても無理がある様である。一は



の如く槌的に

使用し、一は
らば寧ろ有段



の如く斧的に使用せられてをる。もし抉入石斧を支那大陸のものに比較するならば寧ろ有段石斧の類と比すべきであらう。有段石斧の分布圏なるポリネシアに抉入石斧に似たものが發見せられるのは偶然ではない。註

塼室墓

此度の試掘により出土した塼室墓は長方形をなし、東西の長さ三米六五、南北の幅一米九〇である。周壁は上方部が破壊せられて高さが不揃ひであるが南壁は比較的完全に残つてをり、北壁はその西端缺失し、東壁と西壁も北端が亡失してをる。之を構成してをる塼瓦も長方形をなし、側壁の例を擧ぐると大さは長四七糎、厚四・三糎、奥行十八糎であり、側面に泉文、交叉文、及び之を區劃する三線の模様を附してをる。裏には何もないが、横側の一方には交叉文の模様を附し、平たい兩面には羽狀紋が刻してある。また床に敷かれてゐた一塼の大きさも之と大同小異であるが稍小く長三四糎、厚四糎、奥行一六・六糎であつた。

此塼室墓は底面は擾亂せられてゐない様であるが少くともその上部及び東北端及び西北端は何等かの後世の工作の爲破壊されてをる。従つて此塼室の上部が穹窿を呈せしや否やについては今日全く推察することが出来ぬ。壁の高さは今日残つてをる最完全な部分に於て七二糎である。またその入口も西北端であつたと推せられるが今日その部分が缺失してをる爲不明である。

埴室内出土遺物

中より出土した遺物は左の如き種類である。

瓦壺A 東南隅南壁に接し、横に斜めに倒れて発見された。上部に黄緑色の薄い釉を施した痕が見ゆる。肩に二つの把手を向ひ合せに附してをるが其上には菱形を重ね中央に上下に平行縦線を並列した紋様を陰刻してをる。その上の附根の所から平行横線を二條周圍にめぐらし、その下に波狀紋を、また更にその下に平行二線をめぐらしてをる。轆轤を使用して製作し、その痕がよく残つてをる。また所々に氣泡を生じ、底面は平らである。高三四糶、口径二五・一糶、腹徑二四・四糶、底徑一一・五糶(第一圖版1)。

瓦壺B 東南隅、東壁に沿ふて倒れてゐた。前者と大體似てをるがたゞ釉を施した形跡が見えぬ。淡赤色で一部灰色を呈してをる。同じく把手を肩に二個附してをるが、その上に羽狀紋を上下向ひ合せに刻し、その端に縦線を並べ、一方の把手附根の上部、他方把手附根の下に蕨手紋様を羊角の如く向ひ合せに陽刻してをる。並行線條と波狀文とをもつて把手の高さで壺の周圍を裝飾せること前者と同様である。たゞし氣泡は生せず、底面は平らである。高三一・七糶、口径一二・五糶、腹徑廿五・二糶、底徑一二・五糶(第一圖版2)。

四耳壺 南壁に沿ひ、西壁に近き方に立て発見された。上端に接し、黄緑色で玻璃質の釉が明瞭に残存してをる。肩の所に四の小耳が附せられてをるだけで、之と云ふ模様はない。底は縁に比して一糶は

かり凹んでをる。高廿四糎、口径九・八糎、腹徑一七・二糎、底徑一〇・二糎（第二圖版1）。

褐釉小壺 瓦壺A・Bの中間地點、中央部に近き所に發見せられた。内外底共に褐色釉を施してをる。小き鼎狀をなし、三足であり、二の把手が肩に附せられてをるが損じてをる。肩部に二條の溝を表はしてをるがその外に模様はない（第二圖版2）。

耳環 琥珀製、長二・八糎、徑一・一糎、中央部は少しくつぼまつてをる。色は灰褐色を呈し、發掘の際一部分缺け、壁開の状態は褐色玻璃狀をなしてをる（第三圖版4）。

此埴室の年代に就ては有銘埴が出土してゐないので判然したことを述べることは出來ぬが、出土瓦壺は所謂漢式のものである。然し年代的に云へば漢より寧ろ六朝に近い頃の様式とせられ、従つて此埴室墓の構築年代は漢末六朝初期あたりに比定なし得るものであり、なほ委しい研究は將來に待たねばならぬ。此埴室に關する叙述は報告書に譲りたい。

杭州に於て此外雨の中を附近の古跡を訪れ歩いた。有名な靈隱寺の本殿は新しい建築でその佛像は近世式でありたゞ大いと云ふ感じとけばばしいといふ印象を與へるに過ぎなかつたが、その前面兩側にある吳越王時代の經幢は苔蒸して立派なものである。

清蓮禪寺に行くと成程有名な五色の魚は數少くなつてをる。寺僧に聞くと兵隊さんにやつてしまつた

のだと云ふ。足踏みすると沸々として泡の浮く清泉も昔ながらであるが「物資缺乏故寄附を願ふ」と掲示などしてあり此寺の住職中々隅に置けぬ。湖水に臨む峯巒の上に聳ゆる保俶塔も民國廿二年に改築してからカトリックのゴシックの尖塔を見る様で風情も何もない。案内して呉れた支那人と筆談すると「此裡存老塔」と記して平然としてを見るのと古い塔を其儘塗り籠めてしまったものらしいが如何にも支那式の古跡保存法である。之の對岸に聳え西湖の美を添えてゐた雷峰塔は既に崩れて跡は全くの殘骸と化してをる。此塔の附近に淨慈寺の大伽藍が建つてをる。此處が西湖八景の中の南屏晚鐘に當るのである。寺の本尊は新しく大したものでは無いがその背後に少し古風の石佛が奉納されてあつた。また寺背にはコンクリート造りの防空塔あり、中々設備完全である。

杭州市の南なる吳山に海會寺を訪れたが之は民國廿五年は落成したと云ふ清楚な建築であり、その前庭、壁に沿ふて阮元撰嘉慶九年濬杭城水利記と云ふ碑が雨に濡れて立つてをる。その外金石文としては市の北に龍興寺と云ふ小寺あり、市政府の警察に使用されてゐたがその後庭に大中五年の銘ある有名な經幢が立つてをる。頻りに之を調べてゐたら住職が拓本を持つてきて譲つて呉れた。杭州は佛教が盛な地方であり、その爲か對岸に敵と對峙してをるに拘らず市民の氣分は至つて和かなのは嬉しい。小い栗鼠を懷中に飼ひながら人力車を走らせてゐた苦力がゐた程である。

杭州の内外見るものは多いが一番の景觀は何と云つても西湖である。晴れても曇つてもその風情は千

變萬化、遊子の旅愁を慰するものがある。小舟に乗つて湖上を遊覧しながら湖心なる瀛州島と云ふに至る。此處は内部も池となり蓮花が一面咲いてをる。亭榭には兵隊の落書が多いが訪れる者が多いのであらう、既に支那人の茶屋が開かれて客を待つてゐた。此島の近くに有名な三潭印月がある。水中に古い石塔が三つ立つてをり、月明の夜の風情も偲ばれる。湖水に沿ふて名士の別墅多くその中大いのは蔣莊と云ふのであり、服部中尉の滞在せられ私共も御世話になつた放廬も王文叔と云ふ人の別墅で名所の一に數えられてゐるらしい。

杭州附近で考古學的に興味あるのは萬松嶺の窯址である。此處はその昔の南宋の官窯の址で、杭州の南の丘陵に位置し、人力車で行けばあまり遠くない。道端の赤土の崖に宋磁片が點々として落ちてをる。日本に持つて行けば破片でも珍重がられるものであるが本場にくれば實に無盡藏である。この峠の西に雙吊墳と云ふのがあり、夫婦で心中した人を葬つたもの、支那では心中は珍しいのであらう。崔公祠として祭つてをる。求必有應などと云ふ篇額を掲げてあり、御利益があるのであらうが戦時中として支那人の詣るものもなく、瘠せ細つた堂守が出て來たのを見ると可哀想になつて來た。

杭州の領事館には前駐の松村氏が陶器蒐集者であつたので其コレクションが未だ残つてをる。副領事の堂明氏を訪問し、その一部が應接間に飾つてあるのを見せて戴く。古陶出土の有孔石斧二個を初め、紹興出土の印紋土器、宋五代明清の陶器が陳列してあるが殊に吾人の目を側たしめたのは黒陶の逸品で

上半は銅器の爵に似、下半は卣に似、櫛目模様の把手を有したものであつた。

此處に少しく黒陶のことに就て述べて見たい。黒陶は初め山東城子崖に於て發見せられ、爾來安陽に於ても見出だされ、支那陶器の中直接青銅器に類似せるもの多き爲特に支那固有のものとして注意を惹いてをるものである。之が良渚鎮から出土することの知れたのは一九三六年のことで施昕更氏の功績である。遺跡は杭州の北良渚鎮より長明橋に至る十餘支里の地帯に亙つてをる。地はもと瀕海の冲積地である。古蕩と大體類似してをる。この邊一帶よく玉器を出だし村民は農隙に玉を堀るのを副業としてをる。然し石器及び黒陶をも出だすことは注意しなかつた。施昕更氏は此土地の人であつたので古蕩の發掘に參加し、其遺物を見、故郷に於て似たるものを出だすことを想起し、かくて良渚鎮が黒陶遺址であることに初めて注意したのである。氏は一九三六年十二月再度の發掘をなし多くの黒陶を得た。その「杭縣第二區遠古文化遺址試掘簡録」は層位を次の如く認めてをる。表面土層は攪亂せられてをるが土質は青灰で赭黄色塊を帯びてをり、通透性礦質黒濕土と稱するものに當る。その下は灰褐色土で石塊及び灰砂粒を夾雜してをり、多くの地點に朱色の人工らしい遺跡を見る。その下が灰黒濕土で多くの有機質を含み、木炭塊が交つてをる。その下が黒色土と灰綠色土の雜つた土層でその底盤が硬性の細砂土であると云ふ。地表より底盤に至るまでが約三米であるが每層の厚さは一律ならず、相雜亂してをるが大體は以上の如く分けられるとのことである。黒陶は粗製石器を隨伴し大概灰黒土色濕土層中にあり、その上層なる灰

褐色土中朱色の土塊のある所には漢玉が発見せられ、漢代墓葬地區であることは明瞭であり、精製石器も亦此層から出土し、玉器に伴ひ、一番上の農耕土層から印紋及び刻紋の土器が出るのだと云ふ。又遺物の平面的分布を見ると石器の出る所は小山の東北麓及び北麓であり、黒陶遺址も小山の北坡に発見せられ、玉器の遺址は小山の四周及び其接近地點であり、印紋土器片の遺址に至つては四方に擴つてをる。遺物の中石器は粗製と精製とに分つことが出来、前者は打製の石鏃、石鎚、石斧、石庖丁の類で大抵石英安山岩より製せられてをる。之に反し精製石器の方は石刀、石戈、石鏃、石鎌、石戚、石杵、石磨盤、石鏟、石輪の如き穿孔などの發達せる主に磨製の石器で、且つ石質も粘板岩、石灰岩、頁岩、凝灰岩、流紋岩等の外來原料を使用してをる。

黒陶は大抵破損してをるが陶豆類の柄が最も多く其他盆、盥、觚、尊、鼎、甗、孟、甗等十餘種の種類に分けられ、土質は普通粘土をもつて作り、中黒外灰、或は全黒、又は黄であり、砂質を含む極めて多きもある。その外皮の色澤は漆黒色で光澤なるものは少く大部分は灰黒色であり、また赭黄色のものもあり、刻紋は交錯斜條紋、平行斜條紋、斜方格紋等であり、まゝ、繪畫的模様を有する。普通四ミリ位で最も薄いものは一・五ミリから二ミリに及び輪製で城子崖出土のものと同類似してをる。その外に陶鼎足が多く発見されたが、その多數は圓錐式、扁鑿式、梨鏟式等である。また刻紋及び印紋土器片は頗る豊富に発見せられ、その陶質の色は紅灰二類で紅色は火力強大なるために生れたものであり、多く手製

である。

以上は施氏の報告する所であるが次いで何天行氏が前述の如く「杭縣良渚鎮之石器與黑陶」なる小著を一九三七年公刊し、同じく黑陶に就て敷衍してをる。何氏は地層の叙述に就て施氏と少しく異なつてをる。表面を灰褐色の近代耕土層及び墓葬區とし、その下を極めて堅硬な積沙層とし、その下がま、沙土及び紅土塊を含む灰白色土層、その下に緑色の細沙土を雜ふる灰白色土あり、その下が青緑又は青黒の淤土層で最下層が黑膠土であると云ふ。その中黑陶及び粗製石器を包含するのは青緑又は青黒の淤土層で玉器及び精巧石器の一部を包含するものがその上の緑色細沙土を雜ふる灰白色土であると云ふ。

此兩者の記述の中何れがより正確であるかに就ては自分は今すぐ判定し得ない。施氏の記述の方がより納得出來さうであるが之も實際發掘して見なければ何とも斷言し得ない。

何氏はまた黑陶の上に見ゆる紋様を文字の原始タイプと見やうとしてをるが之は恐らくは無理であらう。たゞその裝飾模様はそのモチーフに於て竹、藤類をもつて編んだ籐目の如きものの餘韻を傳し、その母胎文化を推察するに役立つものがある。

兩人共黑陶が粗製石器を伴ひ最深奥の地點より出土することを認めるには一致してをる。此黑陶の年代に就ては何氏は之を簡單に西周以前としてをるが、施氏は山東出土の黑陶を殷商以前と認めても、山東の影響が遅れて江南に及ぶことが考へられるから必ずしも同時代とは限らざるも然し遅れても秦漢時

代に下ることはあるまいと推定してをる。そして兩者共に印紋土器片を上層に出土するものと認め、之を春秋戰國期のものも認めてをる。黒陶の問題は今後極東の考古學界に於て最も興味を中心となるものであらう。

領事館の通譯の董氏の案内で杭州の骨董屋を敎えて貰ひ、古陶出土と傳ふる石器、印紋土器を初め、黒陶破片、宋磁破片等を蒐集し、標本として學校にもち歸ることが出來た。その中黒陶破片の種類と大さを左に擧げる。

高豆柄部A 高二五・五糎、底徑八・五糎、上端徑六糎、中は空ろで下部が開いてをる。色は灰黒色であり、所々表面の黒色が剥げて灰色の内部土が露出してをる。模様は二條の凸起せる輪線が十條附せられてをるだけで、小豆大の穴が上部輪線の中央帯に三個、上部より二番目の輪線の中央帯に三個間隔をおいて上下均齊をもつて穿たれてをるのみである。

同 殘片B 上下が破損してをるが形様前者に酷似してをり、高十九糎、二條の凸起輪線を六つ附し、上部と二番目の空地に粗雜な圓形孔を四つづつ、穿つてをる。色も前者と同じ。

同 殘片C 高十二・五糎、底部少しく破損す。上端徑四・六糎、色黒く、模様は輪線を七條附したのみである。

高豆殘片 柄部下端は破損す、上の皿部のごく一部分は保存さる。高十二・五糎、模様は輪線を附し

たるのみ、その明かな線は七條數へられる。黑色は殆ど剝落し、地の灰色が露出してをる。

臺附盤殘片 前者等より柄の幅が廣く、下端が破損してをるが高六糎、上端徑八糎、九條の輪線を附し、

その間の空地に小孔を幾つも穿つてをる。

盤 殘片 下部の柄部は缺損してをる。皿の形は楕圓形で長十七・五糎、幅十三・一糎であり、模様は

無い。

以上種々の點から見て杭州の調査施行は上々の成績を收め得たと云ひ得る。

かくて六月廿四日、服部部隊の三浦、鈴木の兩君が上海まで出張するのに同行し、杭州を出發することとなる。兩日烈しく降つてゐたが服部氏が驛まで見送りに來られ、患者輸送班の塾員麻植氏にも御遇ひすることが出來た。また嘉興では同室した小島少尉から相田氏が同隊に居られると聞き早速慰問品を託することを得た。かくて沿路無事、上海に歸り、また萬歲館別館に投ずる。

五、上 海

南京や杭州と比べて上海は現代の都である。此處では吾々歴史家は目まぐるしい尖端的事件の渦中に息づまつてしまつて古代の研究に手につかなくなる。それに國際的感情が先鋭化してをるので狭い所であるが地域が幾つにも區劃されて自由に研究してまはることが不可能である。また最も烈しく行はれた

戰爭は多くの文化機關を毀つてしまひ、残念ながら當分は再建の望みはない。残つてをる文化機關も日本の勢力範圍に這入つたものは支那側が逸早く中味を持ち運び去つたもの多く後に殆ど残されてゐない様である。

私共が研究の標的となし得るものは結局戰禍に襲はれない共同租界と佛租界の文化機關である。その中ミューゼウム・ロードにある亞細亞協會北支那支部所屬の博物館及び圖書館は上海に於て是非見るべきものの一つである。

此博物館の蒐藏の中注目されるのはエドガー氏の寄托した揚子江上流地方の蒐集^{コレクシヨン}である。之は J. H. Huston Edgar が一九一四年より一九一五年の間揚子江の上流及び其支流岷江の流域即ち西部四川省を旅行して採集した十數個の石器より成り、彼は之を現在の水準より遙かに高き地層より之を得てをる。

その大部分は新石器時代のものと見るべきものであるが、氏の採集品は所々で個々手を入れたものであり、その出土状態、伴隨遺物等に就て委しい記述なく學問的には大して信賴出來得ないものである。また氏はその外に *Flint* ではないかと云つて人工か否か判然しない石を多く紹介してをるがその或物は廣西省で最近発見された中石器時代石器と類似してをるものがある。要するに四川省西部地方もよく精査すれば廣西省に於て発見せられた如き洞穴が見出されるかも知れぬ。

なほ最近 David C. Graham によつて *A Late Neolithic Culture in Szechwan Province* (Journal of the

West China Border Research Society, Vol. VII. pp. 90—97, 1935) なる短文が公けにされ四川省の南部より発見せられた石器に就て記述されてをるが、その中の或物例へば磨製石斧はエドガーの蒐集に類似してをり、同じく蛤刃で輪廓圓味を帯びてをる。

本博物館にはその外殷墟發掘物若干が陳列せられてをる。その中殷墟を最初に調査した宣教師 James M. Menzies の蒐集のあるのを注目しなければならぬ。その中には此人の名をとつた殷墟發見の鹿の新種 *Elaphurus menziesianus* の角もある。また Frank H. Chalfant と Samuel Couling の山東にて骨董屋から買つた龜甲獸骨文字の蒐集も見逃すことが出来ぬ遺物である。本博物館の目錄として *China's Natural History* と云ふ本が公刊されてをるが名の如く博物が主で考古學は僅かに序説的に取扱はれてをるに過ぎぬのは残念である。

上海附近からも例の印紋土器片は出土するらしいがなにしろ全く丘陵のない冲積平野なのと無闇に郊外の散策が出来ないので搜索することは出来なかつた。たゞ廣東路の骨董店で紹興邊から將來せられたらしい完全の印紋土器を見ただけであるが價が高價なので手を出し得なかつた。

上海に於て中支旅行班は一先づ解散し私だけ、南京の標本整理事業に關係する爲後に残つた。然しこの南京の整理は軍特務部直接の仕事であるので、その發表は將來に譲り、予の紀行は之をもつて擱筆する。

附記

本旅行に對し軍當局、また塾員出征者並びに現地に實業に従事されつゝある塾員諸氏、三井物産の諸氏より受けた種々なる御援助は全く此行をして成果あらしめたものと云ふべきで感謝の辭を見出だすに苦しむ程である。また上海自然科學研究所の諸氏も故新城博士を初め種々好意を示されたことは深く感謝に堪えぬ。然し博士歿後同所は『總親和、總努力』の標語に對し必ずしも忠實な信奉者でない傾向の見ゆるのは極めて遺憾である。なほ本旅行記には寫眞、カット等を簡略にしたが之は將來發行さるべき報告書に載せる積りである。又終りに臨み本旅行並びにそれ以後の企てに多大の援助を與へられた塾當局及び藤山愛一郎、杉山金太郎の諸氏に深く敬意を表したい。

註

此種の有段石斧は朝鮮及び關東州にも發見せられてをる。